

平成13年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

中 条 氏 館 跡

2002

埼玉県熊谷市教育委員会

平成 13 年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

ちゅう じょう し やかた あと
中 条 氏 館 跡

2002

埼玉県熊谷市教育委員会

序

私たちの郷土熊谷には、原始・古代の集落や中世の館跡等の埋蔵文化財が、数多く分布しております。

こうした埋蔵文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証であるとともに、私たち子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代に伝え、さらに豊かな熊谷市形成の礎としていかなければならないと考えております。

本書は、農業集落排水処理施設建設工事に伴う事前調査で、平成13年5月29日から平成13年6月28日にかけて実施された中条氏館跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

今回の発掘調査では、鎌倉時代後半を中心とする井戸跡、土坑跡などが確認され、青磁碗、常滑甕、かわらけなどの土器・陶磁器も検出されました。

この館跡一帯は、中世武士である中条氏の居館があったと伝えられているところです。ただ、学術調査はほとんど行われておらず、その実態には不明な点が多く、今回のような発掘調査の積み重ねが、中条氏を理解する上で、有効な手段と考えられます。

今後、本書の成果が、中条氏の解明の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広く活用されることとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護法の趣旨を尊重され御理解、御協力を賜りました熊谷市市民経済部農政課並びに地元関係者には厚くお礼申し上げます。

平成14年3月

熊谷市教育委員会

教育長 飯塚 誠一郎

例 言

- 1 本書は、埼玉県熊谷市大字上中条1741－3に所在する中条氏館跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査通知に対する埼玉県教育委員会からの指示通知は、平成13年10月2日付け教文第3－546号である。
- 3 発掘調査は、中条星宮2地区・農業集落排水事業における処理施設建設に伴う事前調査であり、熊谷市教育委員会が実施した。
- 4 本事業の組織は、I章のとおりである。
- 5 発掘調査期間は、平成13年5月29日から6月28日までである。整理・報告書作成作業は、平成13年10月1日から平成14年3月29日までである。
- 6 発掘調査は、金子正之・寺社下博が担当した。整理・報告書作成作業は蔵持俊輔が行い、浅野晴樹の補助を得た。
- 7 発掘調査における写真撮影は金子が行った。遺物の写真撮影は蔵持が行った。
- 8 出土品の整理及び図版の作成は蔵持が行った。
- 9 本書の執筆は蔵持が行い、浅野の補助を得た。
- 10 本書の編集は蔵持がたった。
- 11 本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会が保管する。

凡 例

- 1 本書で使用した地図は、国土地理院 1/50000「熊谷」・「深谷」、熊谷市基本図 1/2500「No. 11」・「No. 12」である。
- 2 遺構挿図の縮尺は、原則として次のとおりである。
遺構全測図：1/200、井戸跡・土坑・ピット・溝跡・用途不明遺構：1/40
- 3 全測図等に示す遺構表記の略号は次のとおりである。
井戸跡：S E、土坑：S K、ピット：P i t、溝跡：S D、用途不明遺構：S X
- 4 遺物実測図の縮尺は、1/40に統一した。
- 5 遺構断面図における水平数値は、海拔高度を示しており、単位はmである。遺物実測図の縮尺は原則として1/4である。それ以外のものに関しては、スケールをその都度示している。
- 6 遺物実測図の中心線は、すべて実線で示している。釉薬がみられるものについては、その範囲を一点破線で示した。
- 7 色調・胎土色は、『新版標準土色帳』（農林省水産技術会議事務局監修1967）に照らし最も似た色相を示した。

目 次

口絵

序文

例言

凡例

目次

I	発掘調査の概要	1
1	調査に至る経過	1
2	発掘調査・報告書作成の経過	1
3	発掘調査、整理・報告書刊行の組織	2
II	遺跡の立地と環境	3
III	遺跡の概要	8
1	調査の方法	8
2	検出された遺構と遺物	8
IV	遺構と遺物	8
1	土坑	8
2	井戸跡	13
3	溝跡	14
4	用途不明遺構	15
5	遺構外出土遺物	15
V	調査のまとめ	26

挿図目次

第1図	埼玉県の地形図	第9図	第1号井戸跡出土遺物
第2図	周辺の遺跡分布図	第10図	第2号井戸跡出土遺物
第3図	中条氏館跡全体図 調査地点位置図	第11図	第3号井戸跡出土遺物
第4図	中条氏館跡全測図	第12図	遺構外出土遺物(1)
第5図	第1・2・4～6号土坑	第13図	遺構外出土遺物(2)
第6図	第1～3号井戸跡	第14図	常光院東遺跡出土遺物(1)
第7図	第1～3号ピット 第3号土坑 第1号溝跡 用途不明遺構	第15図	常光院東遺跡出土遺物(2)
第8図	第1号土坑出土遺物	第16図	常光院東遺跡出土遺物(3)
		第17図	権現山遺跡出土遺物

図版目次

図版1	調査区(北から) (南から)	第3号土坑
図版2	第1号井戸跡 第2号井戸跡 第3号井戸跡	第5・6号土坑 第1号溝跡
図版3	第1号土坑 第2号土坑	図版4 出土遺物(1)
		図版5 出土遺物(2)
		図版6 出土遺物(3)
		図版7 出土遺物(4)

I 発掘調査の概要

1 調査に至る経過

農村地域では、若者の都市部への流出が進む一方、混住化、兼業化が進んでいる。こうした状況は、農村集落の機能の低下を招くとともに、用水路の汚濁等を始めとする農業生産環境への悪影響も懸念される。そのような状況を改善する目的の一つとして、中条地区内では農業集落排水施設の一部供用を開始し、生活環境の整備が進められている。その一環として、上中条地内に農業集落排水処理施設の建設が計画された。

熊谷市市民経済部農政課から熊谷市教育委員会あてに、市内上中条に建設予定の農業集落排水処理施設地内における文化財の取扱いについて、平成12年1月7日付け熊農発第1338号で照会があった。熊谷市教育委員会では、直ちに遺跡の範囲確認の調査を行い、以下のような回答を行った。

開発予定地内には中条氏館跡が存在する。当該地は現状保存を行うか、埋蔵文化財に影響を及ぼさない方法での開発が望ましい。やむを得ず埋蔵文化財に影響を及ぼすような開発の場合は、事前に文化財保護法第57条の3項の規定に基づき、発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施するよう回答した。

その後、農政課と社会教育課との間で、現状保存の可能性を含め保存に関する協議を重ねたが、現状保存は困難であり、記録保存の措置を講ずることになり、発掘調査計画、調査期間などについて協議した。記録保存の発掘調査及び整理調査を熊谷市教育委員会が平成13年度に実施することで合意した。

熊谷市長から文化財保護法第57条の3第1項に基づく発掘通知が、平成13年5月14日付け熊農発第435号で埼玉県教育委員会教育長あて提出された。熊谷市教育委員会教育長からは、文化財保護法58条の2の規定に基づく発掘調査通知が埼玉県教育委員会教育長あて提出された。

2 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

発掘調査は平成13年5月29日から6月28日まで行った。調査面積は農業集落排水施設建設に伴う浄化槽埋設等によって破壊を受ける550㎡である。

平成13年5月29日から重機による表土除去を開始した。5月30日より作業員による遺構確認作業を行い、平安時代から室町時代と考えられる遺構・遺物を検出した。6月5日より遺構掘削作業を開始し、6月19日から写真撮影・実測等の記録化を遺構掘削作業と併せて行った。梅雨の影響で作業は困難を極めたが、6月28日に調査は終了した。

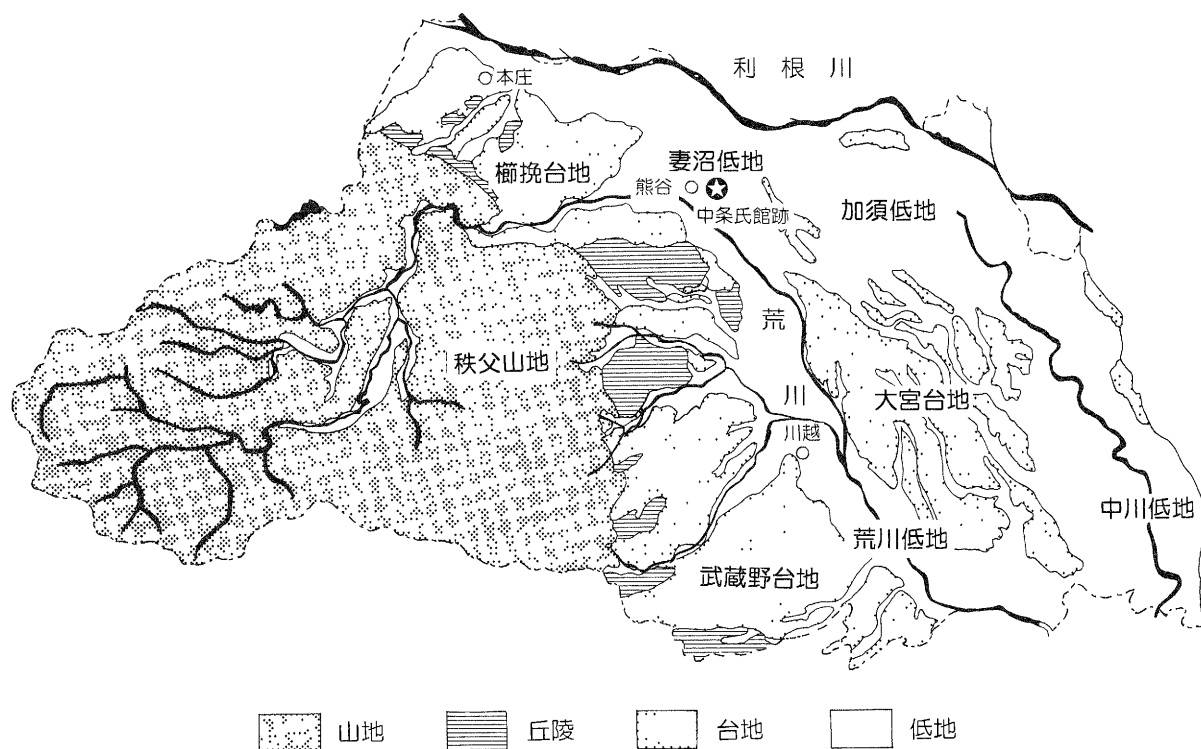
(2) 整理・報告書作成

本書の整理作業は平成13年10月1日より始めた。遺物の洗浄・注記・復元を行い、並行して遺構図面の整理作業を行った。以降、遺物の実測・拓本取り・写真撮影を順次行い、実測図のトレース、遺構・遺物図版の版組を実施した。1月より原稿執筆・割付け等の作業後、報告書の印刷・校正を経て、3月末日に本報告書を刊行した。

3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者 熊谷市教育委員会

教育長	飯塚誠一郎
教育次長	小林 武夫
社会教育課長	岩田 隆
副参事	浅野 晴樹
課長補佐	北 俊明
主幹兼係長	金子 正之
主査	寺社下 博
主査	浅見 敦夫
主任	吉野 健
主事	松田 哲
発掘調査員	小野 寺弘光
発掘調査員	蔵持 俊輔
発掘調査員	加藤 隆則



第1図 埼玉県の地形図

Ⅱ 遺跡の立地と環境

熊谷市は、埼玉県の北部に位置しており、県北部地域の交通、経済等の様々な分野における中心的役割を担う中核都市である。市の南側には荒川が、北側には妻沼町を挟んで利根川がそれぞれ西から南東方向に向かって流れ、市域の大半は両河川によって挟まれている。地形的には市の西側に櫛挽台地、東側には妻沼低地が広がっている。

中条氏館跡は、熊谷市北東部の上中条地区に所在し、常光院とその周辺地域を遺跡範囲とする。本館跡は埼玉県指定史跡であり、現在、土塁・堀の一部が残存している。妻沼低地の自然堤防上に立地していて、標高は約25mである。上中条・大塚・今井・上川上地区一帯には中条古墳群や中条遺跡・北島遺跡等が広がっており、多くの古墳や集落跡が確認されている。今回の調査箇所は常光院の北側にあたる。

次に、本遺跡を中心とした周辺の歴史的環境を概観してみる。

弥生時代において、中期は環濠集落が発見された池上遺跡や、古い段階の須和田期の方形周溝墓が検出された小敷田遺跡など、きわめて重要な遺構が確認された遺跡が分布している。これらの周囲には、天神遺跡、平戸遺跡、北島遺跡などがある。

後期の遺跡は、東沢遺跡（地図中未掲載）、小敷田遺跡、池守遺跡、北島遺跡がみられる。

古墳時代は、天神遺跡、雷電遺跡、権現山遺跡、東沢遺跡、池上遺跡、池守遺跡、小敷田遺跡、北島遺跡において前期の遺構・遺物が確認されている。

小敷田遺跡からは畿内や東海地方等の外来系土器が多数確認されており、方形周溝墓も検出されている。また、東沢遺跡とともに、河川跡から多量の木製農具が検出された遺跡として知られている。

古墳時代中期は、他の時期に比べ不明な点が多いが、権現山遺跡、常光院東遺跡、北島遺跡等で遺構・遺物が検出されている。

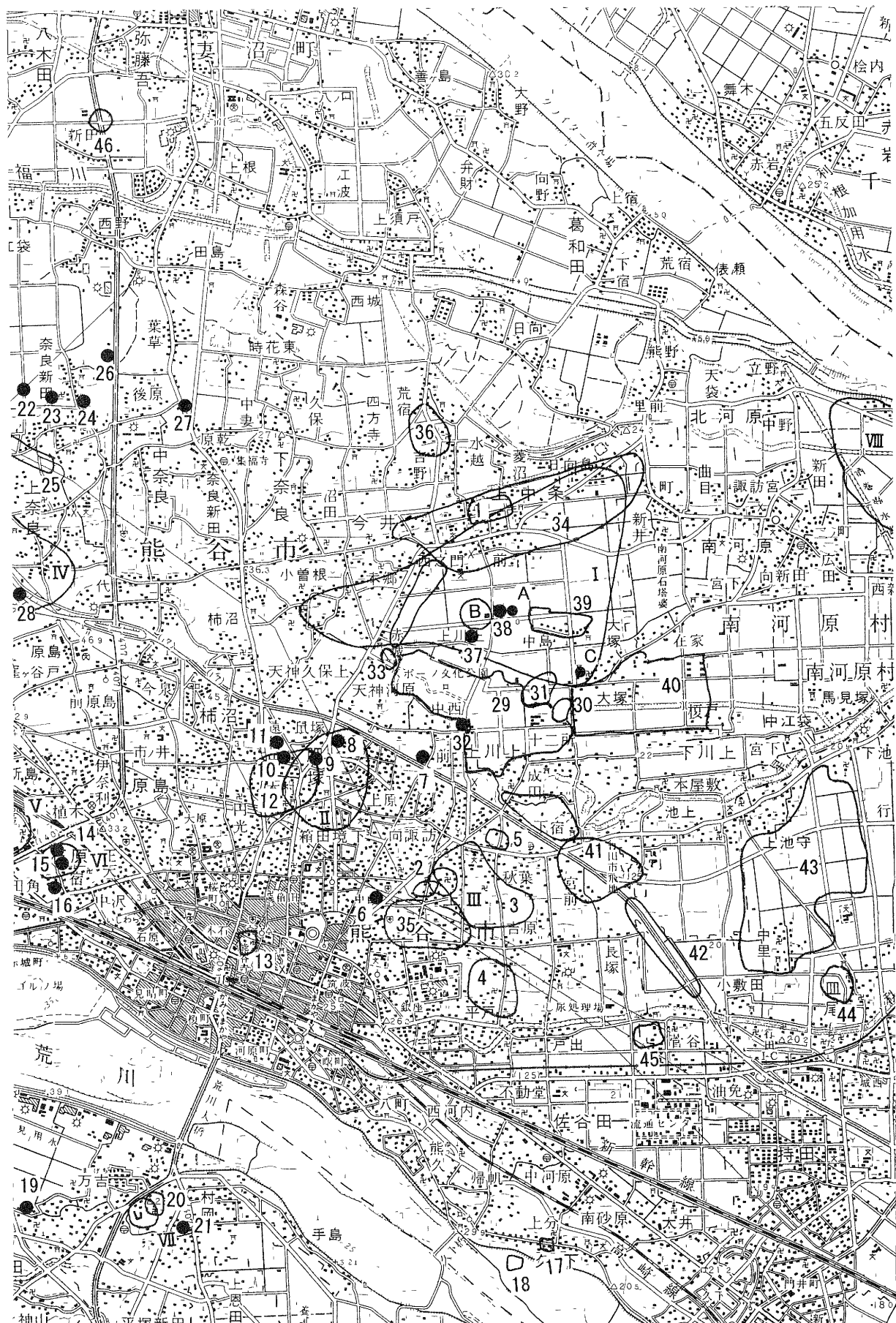
古墳時代後期は、遺跡が爆発的に増加する。集落については、中島遺跡、光屋敷遺跡、北島遺跡、諏訪木遺跡があげられる。

一方、古墳をみると中条古墳群が形成されている。中条古墳群は上中条支群と今井支群が主体となり、その分布は東西に帯状に広がる。これらのうち鎧塚古墳、女塚1号墳は帆立貝式古墳であり、他は円墳である。

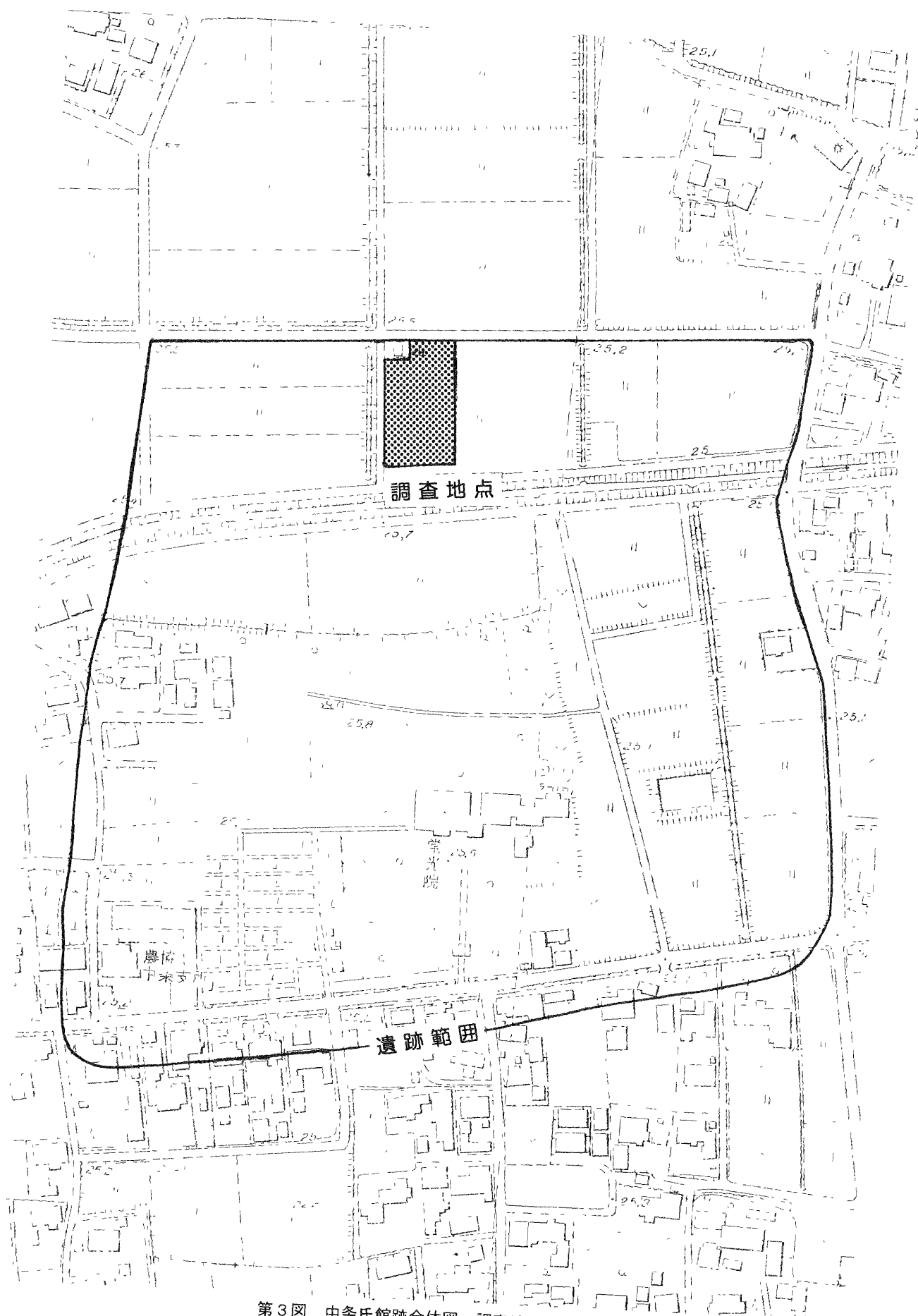
奈良～平安時代については、北島遺跡が大規模な集落としてあげられ、多数の住居跡とあわせて大規模な掘立柱建物跡、道路状遺構、河川跡などが検出されている。この北島遺跡を中心として、天神遺跡、中島遺跡、常光院東遺跡、光屋敷遺跡が周辺にみられる。

平安時代末から中世になると、武蔵七党やその他の在地武士団の館跡が散在するようになるが、その実態は把握されていない。熊谷市内には中条氏館跡をはじめとして、光屋敷遺跡、久下氏館跡、西別府館跡（地図中未掲載）、別府城跡（地図中未掲載）、別府氏館跡（地図中未掲載）、玉井陣屋跡（地図中未掲載）、黒沢館跡（地図中未掲載）、奈良氏館跡（地図中未掲載）、肥塚氏館跡、熊谷氏館跡、河上氏館跡、市田氏館跡、成田氏館跡、兵部裏屋敷跡、箱田氏館跡、村岡館跡等多くの城館跡が所在している。

中条氏館跡は中条家長が居住したもので、建立は12世紀後半であると考えられている。現在は常光院敷地、水田、畑などになっており、その痕跡は常光院の北側の土塁と堀にみられ、これらは常光院二十



第2図 周辺の遺跡分布図



第3図 中条氏館跡全体図 調査地点位置図

三世住職邦教上人の書き残した古図と一致するものである。常光院は祖父常光の菩提を弔うために、館内に家長が建久三年に建立したのが始まりと言われており、おそらくは持仏堂を拡張したものと考えられている。以前の調査・試掘の際にかわらけ、常滑焼甕、渥美焼片口鉢、五輪塔等の遺物が出土している。

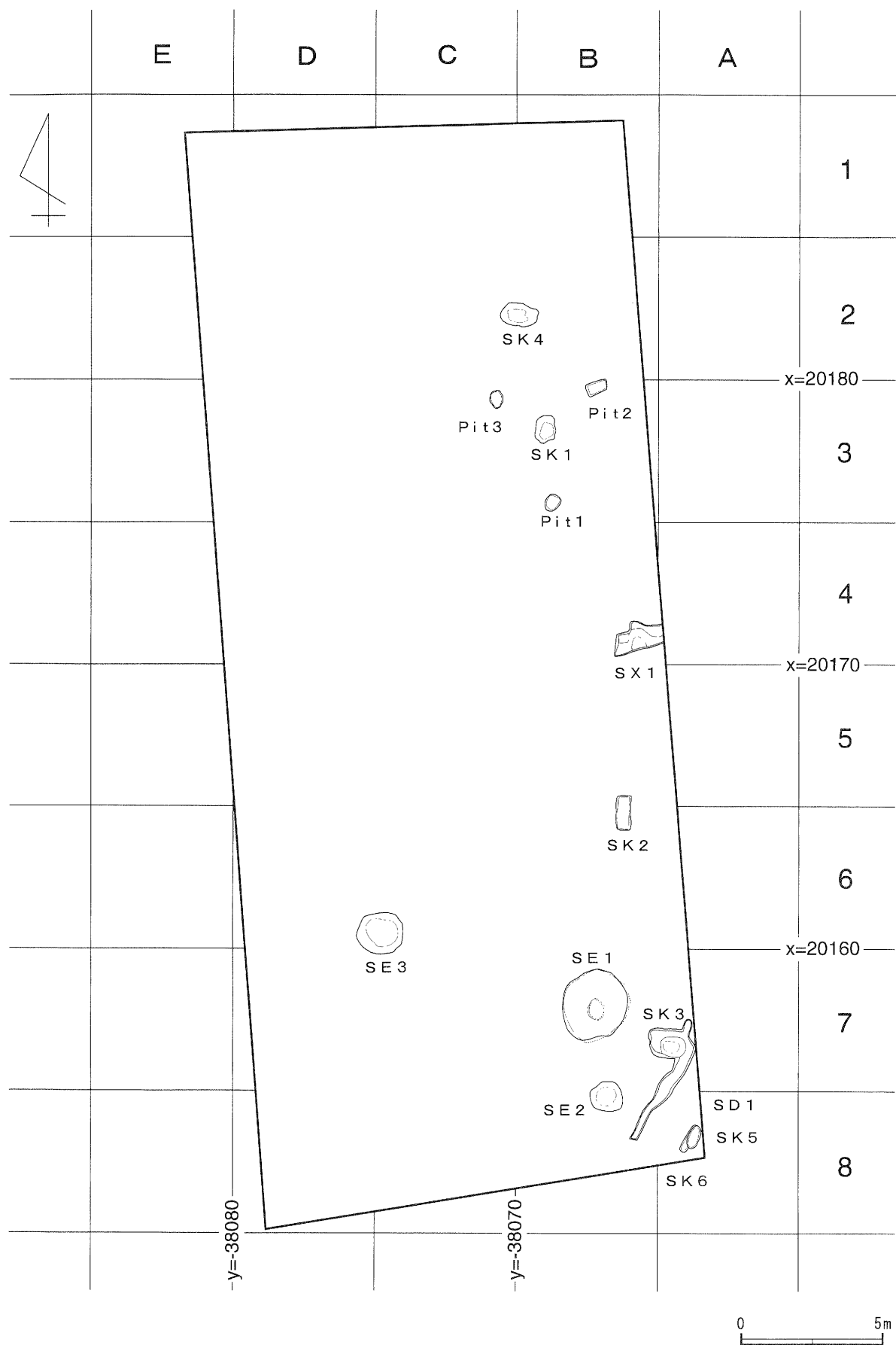
光屋敷遺跡は中条常光の館跡があったと考えられており、現在は北面土塁の一部が残存している。発掘調査により居館の堀と考えられる溝が検出され、かわらけ、板碑、五輪塔や刀子などの金属製品が出土している。別府城跡は別府氏館跡とともに、別府氏の館跡として伝えられている。その別府氏一族の墓は板碑三基、五輪塔二基が安楽寺にあり、県の史跡として指定されている。

これらのほかでは、黒沢館跡で良好な資料が検出されている。黒沢館跡は発掘調査により、南辺に折をもつ台形を呈し、西南角に出隅をもって全周する溝の他、土塁、虎口、柱穴、土坑、集石遺構等が確認されている。遺物は、14から15世紀の板碑や瀬戸・美濃の陶器、内耳土器、かわらけ等が出土している。渡辺華山の記した「訪隠録」の記載に「黒沢屋敷」があり、記載と遺構が一致する貴重な例である。

中世の遺跡は、これら城館跡のほか墓域も多く見つっている。三ヶ尻遺跡、樋の上遺跡、若松遺跡、社裏遺跡、社裏北遺跡、社裏南遺跡、西方遺跡（いずれも地図中未掲載）がこれにあたる。樋の上遺跡は金浄寺跡、若松遺跡は般若寺跡と言われており、土葬墓、火葬跡が見つっている。また、かわらけ、内耳土器、青磁、白磁、常滑等の陶器、板碑、石臼等が出土している。三ヶ尻遺跡、社裏遺跡、社裏北遺跡、社裏南遺跡では土壌墓群が、西方遺跡では中世から近世にかけての土壌墓が重なり合って検出されている。しかしながら、中世以降の歴史の実態はまだ情報不足であり、今後の調査成果によるところが多く、情報の蓄積に期待するところである。

第2図掲載遺跡一覧

1 中条氏館跡	2 藤之宮遺跡	3 諏訪木遺跡	4 平戸遺跡	5 成田氏館跡	6 箱田氏館跡
7 河上氏館跡	8 八幡上遺跡	9 出口上遺跡	10 出口下遺跡	11 肥塚中島遺跡	12 肥塚館跡
13 熊谷氏館跡	14 天神前遺跡	15 兵部裏屋敷跡	16 御蔵場跡	17 市田氏館跡	18 久下氏館跡
19 万吉西浦遺跡	20 村岡館跡	21 北西原遺跡	22 中耕地遺跡	23 西通遺跡	24 東通遺跡
25 土用ヶ谷戸遺跡	26 横塚山古墳	27 奈良東耕地遺跡	28 下河原上遺跡	29 北島遺跡	30 天神東遺跡
31 田谷遺跡	32 上川上東遺跡	33 天神遺跡	34 中条遺跡	35 前中西遺跡	36 光屋敷遺跡
37 女塚遺跡	38 鎧塚遺跡	39 中島遺跡	40 中条条里遺跡	41 池上遺跡	42 小敷田遺跡
43 池守遺跡	44 星宮皿尾遺跡	45 持田藤の宮遺跡	46 弥藤吾新田遺跡		
I 中条古墳群	A 鎧塚古墳	B 女塚1～6号墳	C 大塚古墳	II 肥塚古墳群	III 上之古墳群
IV 玉井古墳群	V 坪井古墳群	VI 石原古墳群	VII 村岡古墳群	VIII 酒巻古墳群	



第4図 中条氏館跡全測図

Ⅲ 遺跡の概要

1 調査の方法

発掘調査の方法は、調査区内に国家座標に合わせた5 mグリッドを設定した。グリッドは調査区北東隅を原点として、東西方向は東から西へA・B・・・とし、南北方向は北から南へ1・2・・・と呼称した。

発掘調査は、まず遺構確認面まで重機による表土剥ぎを行った。その後、人力により遺構確認作業、遺構の発掘を行い、写真撮影、遺構の実測による記録化を順次行った。遺構の実測は5 mグリッドの杭を基準として1 m間隔のメッシュを張り、簡易遣り方による実測を行った。

2 検出された遺構と遺物

検出された遺構は、土坑6基、ピット3基、井戸跡3基、溝跡1条、用途不明遺構1基である。ほとんどの遺構で時代・時期を決定づけるような遺物の出土状況はみられなかった。包含層出土遺物をみると、土師質土器などの中世のものを主体としていることから、これらの遺構も中世に属するものと考えられる。

土坑は、調査区の東側で、南北に分布していた。完形の土師質土器の皿が検出された第1号土坑以外は、時代・時期が不明であるが、覆土の特徴が共通しているためほぼ同時期の遺構と考えられる。

ピットは、調査区の北側にみられ、ならぶものはなかった。

井戸跡は、調査区南側に集中してみられた。いずれの井戸跡からも、覆土中から遺物が検出された。掘り方は、その形状から2つに分けられる。1つは垂直に掘り込まれ、断面形が方形を呈し、底面の中心に円形の小形の掘り込みを持つもので、第1号井戸跡がこれにあたる。もう1つは傾斜をつけて掘り込まれ、平底である。第2・3号井戸跡がこれにあたる。

溝跡は、調査区南東で1条検出された。

調査区東側で、用途が不明な掘り込みが1基検出され、用途不明遺構として取り扱った。

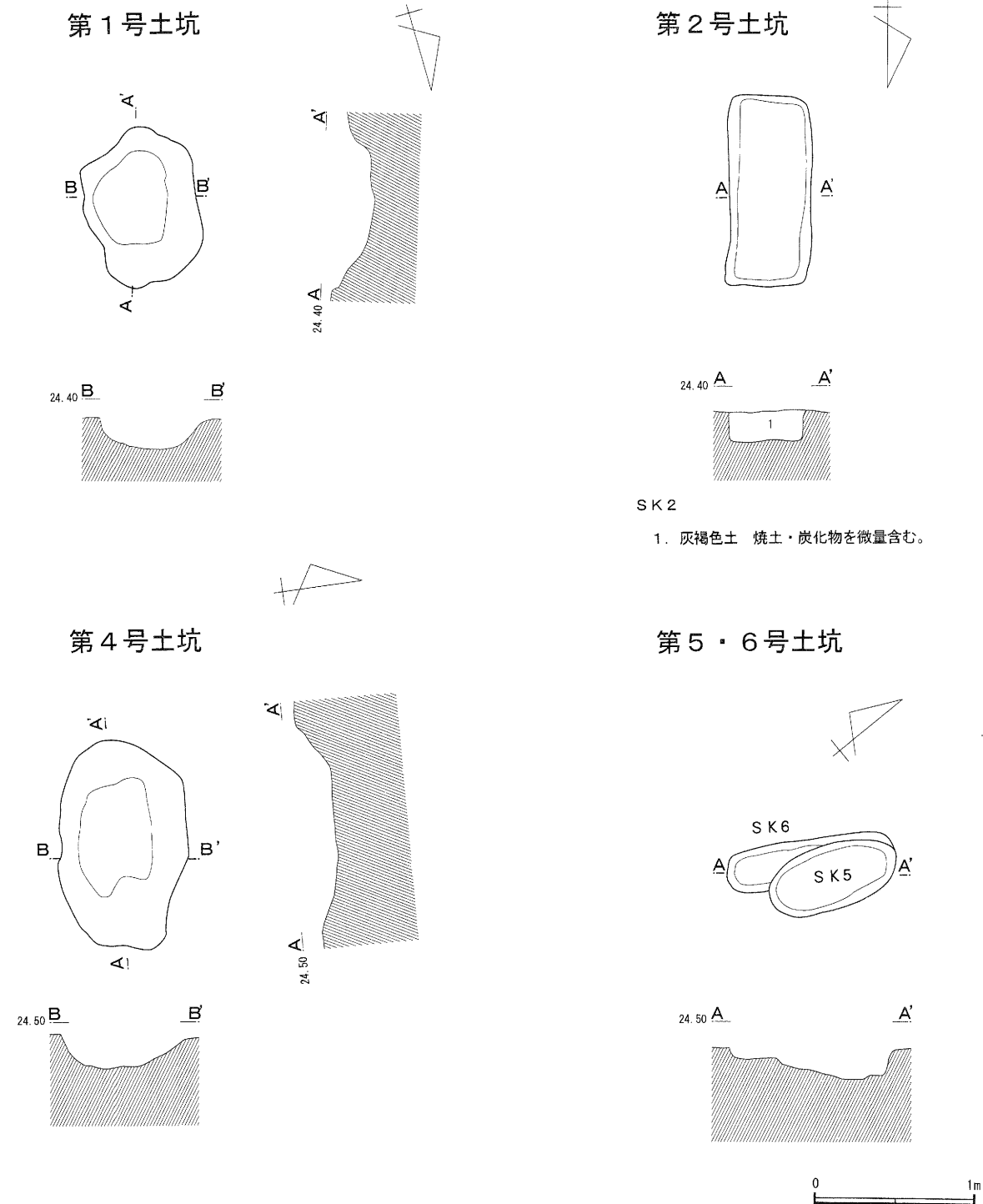
出土遺物はそのほとんどが包含層からの出土であり、主体となるのは中世の土師質土器皿（かわらけ、ロクロ土師器等と呼ばれている）、在地産の瓦質土器片口鉢であった。土師質土器皿はその形状からいくつかのタイプに分類することができた。遺物は、他に龍泉窯系青磁碗、白磁合子身、常滑焼甕などがあった。中世以外の遺物は、平安時代の土師器・須恵器と近世の陶器がわずかながら検出された。遺物の出土量は、コンテナ2箱であった。

Ⅳ 遺構と遺物

1 土坑

第1号土坑（第5図）

調査区中央よりやや北、B-3グリッドで検出された。規模は長軸1.25 m、短軸0.60 mを測る。確認面からの深さは0.19 mで、緩やかな傾斜で掘り込まれており、底面付近でさらに緩やかになり底面へと至る。底面はほぼ平らである。平面プランは不規則なほりだしがみられる不整円形である。

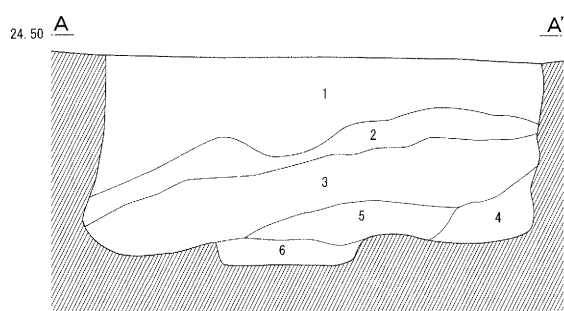
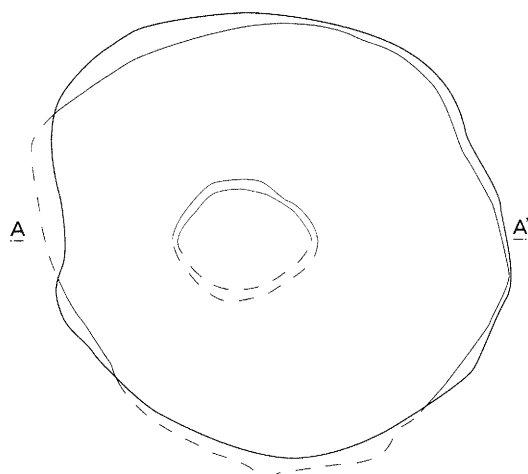


第5図 第1・2・4～6号土坑

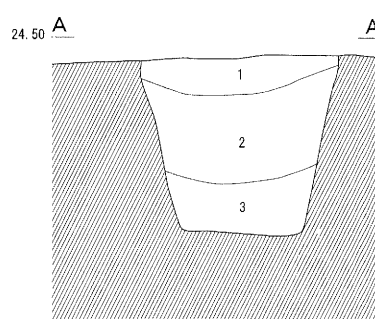
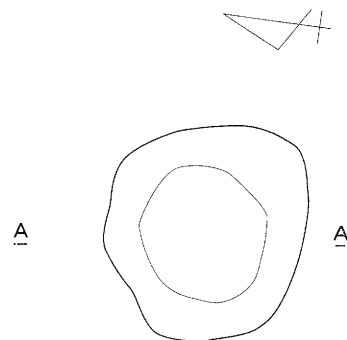
覆土は混入物の見られない灰褐色土による単一層であった。

出土遺物（第8図）は、土師質土器皿が3点検出された。また、緑泥片岩が覆土中より検出された。1・2・3は土師質土器皿であり、ロクロ成形されている。1の器形は、体部下半にゆるやかな段を有するが、平底から体部が内湾し口縁部で直立する。底部と体部の境界は明瞭である。残存状態はほぼ完形である。口径13.6cm、高さ4.0cm、底径8.2cmを測る。胎土は緻密で、赤褐色粒子、黒色粒子、雲母をわずかに含み、軟質である。色調はにぶい黄橙色を呈し、焼成はやや不良である。

第1号井戸跡



第2号井戸跡



SE 1

1. 暗灰褐色土 火山灰・礫を含む。焼土粒子・炭化物を微量含む。
2. 暗灰褐色土 黄褐色土ブロック・焼土粒子・炭化物・礫を含む。
3. 暗褐色土 焼土粒子・炭化物を含む。
4. 茶褐色土
5. 暗灰褐色土 粘性あり。
6. 黒褐色土 粘性あり。

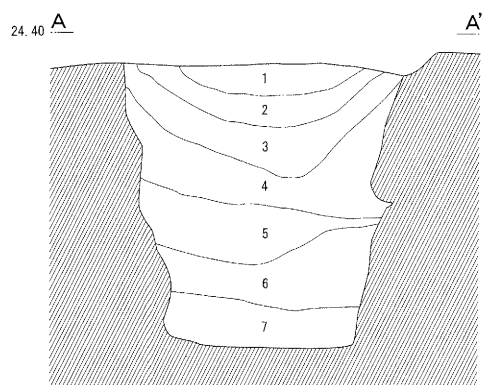
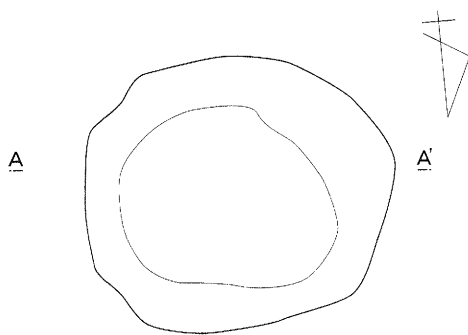
SE 2

1. 灰褐色土 焼土・炭化物・酸化鉄を微量含む。
2. 褐色土 焼土・炭化物を含む。
3. 茶褐色土

SE 3

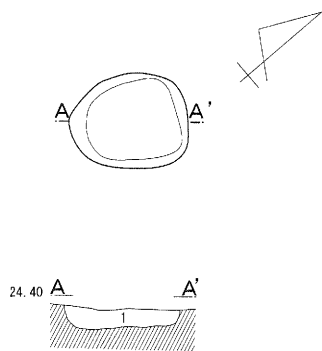
1. 暗褐色土 炭化物微量含む。
2. 暗褐色土 炭化物多量・焼土微量・黄褐色土ブロックを含む。
3. 暗褐色土 炭化物多量・黄褐色土ブロック微量含む。
4. 暗褐色土 炭化物を含む。黄褐色土ブロックを多く含む。
5. 暗褐色土 炭化物多量含む。
6. 暗茶褐色土 粘性あり。
7. 灰褐色土 粘性あり。

第3号井戸跡



第6図 第1～3号井戸跡

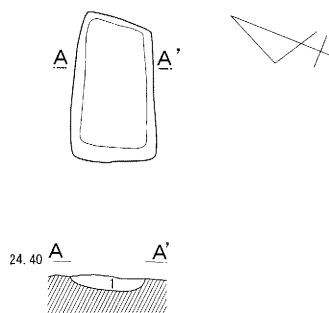
第1号ピット



Pit 1

1. 褐色土

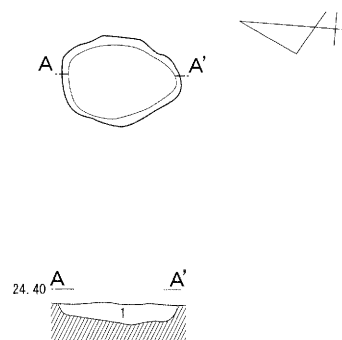
第2号ピット



Pit 2

1. 暗灰褐色土 褐色土ブロックを多く含む。

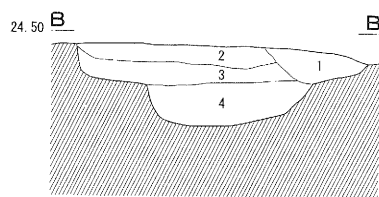
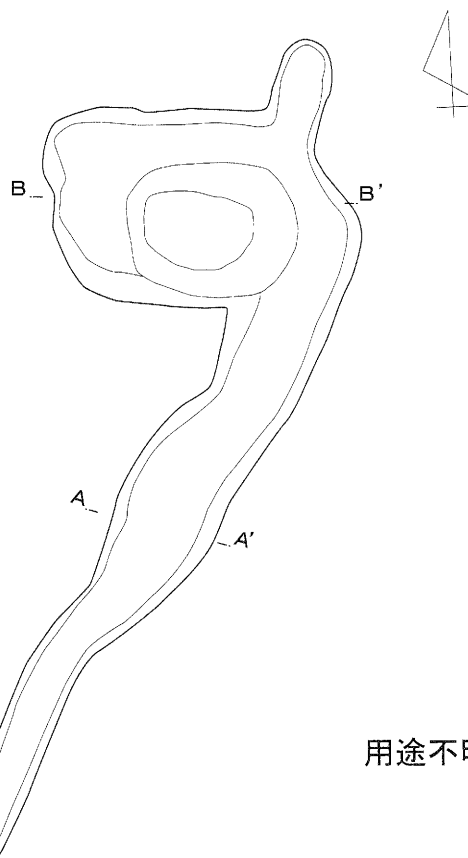
第3号ピット



Pit 3

1. 灰褐色土

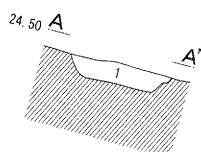
第3号土坑



SD1-SK3B

1. 灰褐色土 土器片を微量含む。
2. 灰褐色土 焼土粒子を微量含む。
3. 灰褐色土 酸化鉄を多量含む。
4. 灰黄褐色土

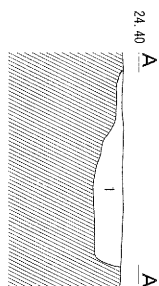
第1号溝跡



SD1A

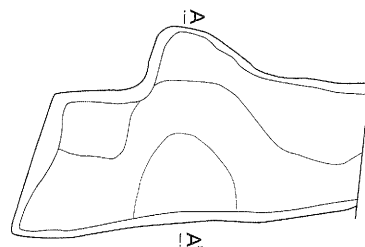
1. 灰褐色土 灰色土ブロック含む

用途不明遺構

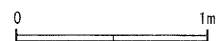


SX1

1. 灰褐色土



調査区外



第7図 第1～3号ピット 第3号土坑 第1号溝跡 用途不明遺構

2の器形は、体部が内湾し口縁部がナデによりゆるやかに直立する。残存率は口縁部の10%であり、口径16cmを測る。胎土は緻密で、赤褐色粒子、黒色粒子、雲母をわずかに含み、軟質である。色調はにぶい黄橙色を呈し、焼成はやや不良である。

3の器形は、底部と体部の境が不明瞭である。底部は回転糸切り痕がわずかに残る。残存率は底部の15%であり、底径7.8cmを測る。胎土は緻密で、雲母をわずかに含み、軟質である。色調はにぶい橙色を呈し、焼成はやや不良である。

第2号土坑（第5図）

調査区中央よりやや南、B-5・6グリッドにまたがって検出された。規模は長軸1.21m、短軸0.51mを測る。確認面からの深さは0.19mで、垂直に掘り込まれており、そのまま底面へと至る。底面は平らである。平面プランは長方形である。

覆土は灰褐色土による単一層で、焼土・炭化物をわずかに含んでいた。

遺物は検出されなかった。

第3号土坑（第7図）

調査区南東、A-7グリッドで検出された。規模は長軸1.53m、短軸1.05mを測る。確認面からの深さは0.42mで、垂直に掘り込まれており、底面付近で緩やかになり底面へと至る。底面はほぼ平らである。土坑内西側には深さ0.19mのテラスが設けてあった。平面プランは、東側が第1号溝に切られて不明だが、隅丸方形であると思われる。

本土坑は第1号溝跡と重複しているが、土層断面の切り合いから見ると本土坑の方が古いと考えられる。

覆土は灰褐色土を主体とする3層からなる。

遺物は検出されなかった。

第4号土坑（第5図）

調査区中央よりやや北、C・B-2グリッドにまたがって検出された。規模は長軸1.41m、短軸0.82mを測る。確認面からの深さは0.22mで、緩やかな傾斜で掘り込まれており、底面付近でさらに緩やかになり底面へと至る。特に東側の傾斜は非常に緩やかである。底面はほぼ平らである。平面プランは東西の掘り方がはりだす不整円形である。

覆土は混入物の見られない灰褐色土による単一層であった。

遺物は検出されなかった。

第5号土坑（第5図）

調査区南東、A-8グリッドで検出された。規模は長軸0.85m、短軸0.42mを測る。確認面からの深さは0.2mである。東側はほぼ垂直に掘り込まれており、そのまま底面へと至る。一方、西側はゆるやかに掘り込まれており、底面付近でさらに緩やかになり底面へと至る。底面はほぼ平らである。平面プランは楕円形である。

本土坑は第6号土坑と重複しているが、掘り方からみると本土坑の方が新しいと思われる。

覆土は混入物の見られない灰褐色土による単一層であった。

遺物は検出されなかった。

第6号土坑（第5図）

調査区南東、A-8グリッドで検出された。規模は長軸1.07 m、短軸0.28 mを測る。確認面からの深さは7 cmと浅く、緩やかな傾斜で掘り込まれており、そのまま底面へと至る。底面は平らである。平面プランは細長い長方形である。

本土坑は第5号土坑と重複しているが、掘り方からみると本土坑の方が古いと思われる。

覆土は混入物の見られない灰褐色土による単一層であった。

遺物は検出されなかった。

2 井戸跡

第1号井戸跡（第6図）

調査区南東、B-7グリッドで検出された。平面プランは円形である。規模は、長軸2.34 m、短軸2.32 mを測る。遺構はほぼ垂直に掘り込まれそのまま底面へと至る。また、掘り方は部分的に底面付近でオーバーハングする。底面は平らであり、確認面からの深さは1.05 mを測るが、中央部分に直径0.8 mの円形の掘り込みがあり、深さは底面よりさらに0.13 mを測る。

覆土は暗灰褐色土を主体とする複数層からなる。

出土遺物（第9図）は、覆土中から瓦質の鉢が3点、土師質土器皿が1点検出され、図示した。また同じく覆土中から加工痕のある軽石が検出され、おそらく石室に用いられた切石と考えられるが、今回は図示しなかった。

1・2・3は瓦質の鉢で在地産である。4は土師質土器皿である。1は片口鉢で播目を持たない。口縁部は断面が方形を呈するが、口端が摘み上げられている。体部下半外面は指頭押圧による調整が加えられている。器肉は体部下半がやや薄くなる。残存率は全体の10%であり、口縁部から体部にかけての破片である。口径は22.2 cmを測る。胎土はやや粗く、赤褐色粒子、黒色粒子、長石、礫を含む。色調は外面が灰白色を呈し、内面が浅黄色である。焼成はやや良好である。

2は、口辺部が横位のナデにより調整されている。口縁部の断面形状は、口端が平坦な方形を呈する。残存率は全体の10%で、口縁部から体部にかけての破片である。口径は27.4 cmを測る。胎土はやや粗く赤褐色粒子、黒色粒子、雲母、長石、礫を含む。色調は灰色を呈し、焼成はやや不良である。

3は、口縁部の断面形状が方形を呈し、口端部が摘み上げられている。口辺部は横位のナデにより調整されている。体部下半は指頭押圧による調整が加えられている。器肉は体部下半が薄くなる。残存率は全体の20%であり、口縁部から体部にかけての破片である。口径26.4 cmを測る。胎土はやや粗く、黒色粒子、白色粒子、雲母、長石、礫を含む。色調は浅黄橙色を呈し、焼成はやや良好である。

4は土師質土器皿で、ロクロ成形されている。底部は平底であり、底部と立ち上がり部分の傾きはゆるやかである。残存率は底部の10%であり、底径8.8 cmを測る。胎土は緻密で、黒色粒子、長石をわずかに含み、軟質である。色調はにぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

第2号井戸跡（第6図）

調査区南東、B-7・8グリッドにまたがって検出された。平面プランは、南東側の掘り方が軽くはりだす不整形である。規模は、長軸1.12m、短軸1.04mを測る。確認面からの深さは0.95mで、掘り込みは急な傾斜でありそのまま底面へと至る。底面は平らである。

覆土は、褐色土を主体とする3層からなる。

出土遺物（第10図）は、白磁の合子1点と陶器の破片が検出され、図示した。

1は陶器の口縁部の破片で灰釉が施されている。器種は不明である。胎土は緻密で、黒色粒子をわずかに含む。色調は胎土、釉薬ともに灰白色である。焼成は良好である。釉薬はハケヌリされている。

2は白磁の合子の身である。残存率は全体の10%であり、口径6.4cm、器高1.7cm、底径5.2cmを測る。胎土は緻密で、黒色粒子をわずかに含む。色調は胎土、釉薬ともに灰白色である。焼成は良好である。体部外面中央と内面全体に釉薬が施されている。釉薬は二次的に被熱し、火脹れをおこしている。

第3号井戸跡（第6図）

調査区南、C・D-6グリッドにまたがって検出された。平面プランは、西側の掘り方がわずかにはりだす円形である。規模は、長軸1.63m、短軸1.45mを測る。確認面からの深さは1.5mで、掘り込みはやや急な傾斜でそのまま底面へと至る。底面は平らである。掘り方の傾斜半ばに部分的にオーバーハングするところが見受けられるが、これは掘り方が崩落した痕跡と考えられる。

覆土は、暗褐色土を主体とする複数層からなる。

出土遺物（第11図）は、瓦質の鉢1点、土師質土器皿が2点、鉄製品の釘1点が検出された。また、第1号井戸跡と同じく加工痕のある軽石と常滑焼壺破片が検出されたが、図示しなかった。

1・2は土師質土器皿である。3は瓦質の鉢である。4は鉄製品である。1はロクロ成形の皿である。器形は、口縁部がやや直線的に開く。底部は上げ底気味である。残存率は全体の45%であり、口径12.2cm、高さ3.1cm、底径7.8cmを測る。胎土は緻密で、黒色粒子、礫をわずかに含み、軟質である。色調はにぶい黄橙色を呈し、焼成はやや不良である。

2はロクロ成形の皿である。底部は器肉が厚く、回転糸切り痕が明瞭に残る。残存率は底部の20%であり、底径9.0cmを測る。胎土は緻密で、雲母、石英をわずかに含み、軟質である。色調はにぶい黄橙色を呈し、焼成はやや良好である。

3は在地産の鉢である。口縁部の口端部はつよく摘み上げ鋭角に作られている。口辺部は横位のナデにより調整されている。体部下半外面は指頭押圧による調整が加えられている。残存率は全体の20%であり、口縁から体部にかけての破片である。口径は26cmを測る。胎土は緻密で、黒色粒子、白色粒子、礫をわずかに含む。色調は灰色である。焼成は良好で、須恵質に焼き上がっている。

4は釘である。長さ5.5cm、幅1.2cm、重さ10.7gをはかる。

3 溝跡

第1号溝跡（第7図）

調査区南、A-7・8、B-8グリッドで検出された。北はA-7グリッドから、南はB-8グリッドまでの間に検出され、南西から北東方向へ走っていた。検出された規模は、全長4.65m、幅0.56～0.27m、深さ0.17mである。溝幅はA-7・8グリッドの境界付近で最大幅をもち、そこ以外は狭まりほぼ同じ幅を保っている。断面形態は台形を逆にした形状を呈している。底面はほぼ平らで幅も広く、掘り込みは緩やかな傾斜であり、そのまま底面へと至る。

本溝跡は、第3号土坑と重複関係にある。土層断面の観察から、第3号土坑を本溝跡が切っており、本溝跡は第3号土坑より新しいと考えられる。

覆土は灰褐色土による単一層で、灰色土ブロックの混入が見られた。

遺物は検出されなかった。

4 用途不明遺構（第7図）

調査区東、B-4グリッドで検出された。遺構の東側は、調査区外のため不明である。残存する長軸は1.81m、短軸1.03mの規模である。確認面からの深さは0.16mで、ほぼ垂直に掘り込まれており、底面は平らである。遺構内北側には、深さ3cmのテラスが設けてあった。平面プランは長方形で、北側の掘り方半ばに突起状のはりだしがみられた。

覆土は灰褐色土による単一層で、混入物は見られなかった。

遺物は検出されなかった。

5 遺構外出土遺物（第12・13図）

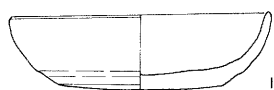
出土遺物の多くは遺構外での検出であった。土師質土器皿を32点、青磁を2点、白磁を1点、瓦質の土器を2点、常滑焼の甕を2点、瀬戸・美濃系陶器を1点、陶器の破片を1点、須恵器を2点、土師器を1点検出した。

1から32は土師質土器皿で、すべてロクロで成形されていたものであった。33・34は青磁で、いずれも龍泉窯系青磁碗である。35は白磁皿である。36・37はどちらも瓦質の土器で、36は壺、37は鉢である。38・39は常滑焼の壺である。40は瀬戸・美濃系陶器の灯明皿である。41は陶器で、灰釉がかかっている。42は須恵器の皿である。43は須恵器の坏または壺である。44は土師器の台付甕である。

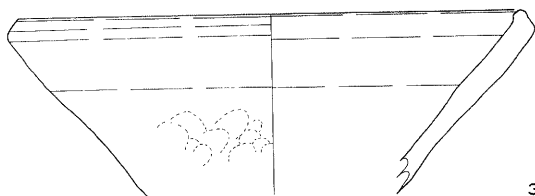
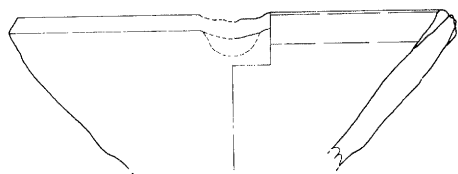
1は確認面で採取した。器形は底部がゆるやかに内湾して直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。底部はわずかに上げ底になり、回転糸切り痕が残る。残存率は全体の40％であり、口径11.8cm、器高3.9cm、底径5.6cmを測る。胎土は緻密で黒色粒子、雲母をわずかに含み軟質である。色調は橙色を呈する。焼成はやや良好である。

2は確認面で採取した。器形は体部下半で内湾し、直線的に立ち上がる。底部が円柱状に残り、回転糸切り痕を明瞭に残す。残存率は全体の80％であり、口径13.4cm、器高3.5cm、底径8cmを測る。胎土は緻密で黒色粒子、赤褐色粒子、雲母をわずかに含み軟質である。色調はにぶい橙色を呈する。焼成はやや不良である。

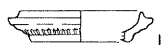
3は確認面で採取した。器形は立ち上がり内湾し口縁部付近で直立する。底部は回転糸切り痕とスノコ状圧痕が残る。底部内面に静止指ナデ調整がみられる。残存率は全体の60％であり、口径13.2cm、



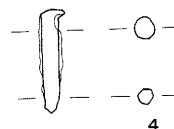
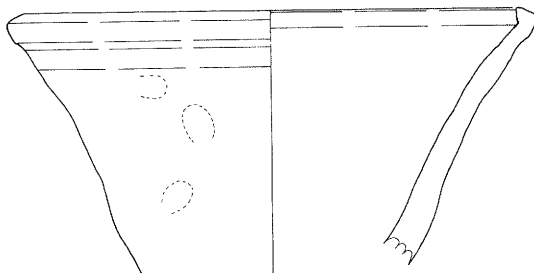
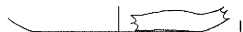
第8図 第1号土坑出土遺物



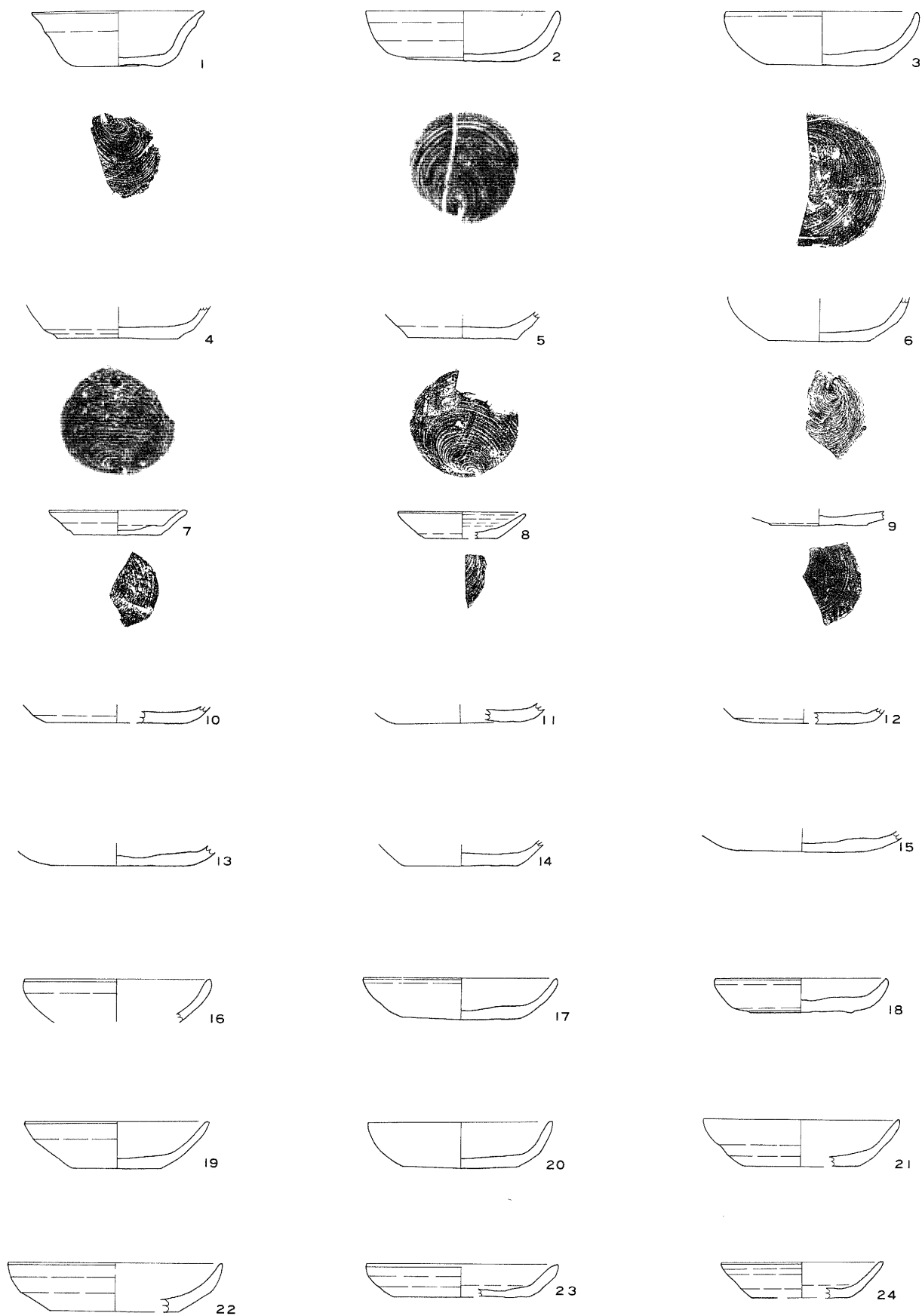
第9図 第1号井戸跡出土遺物



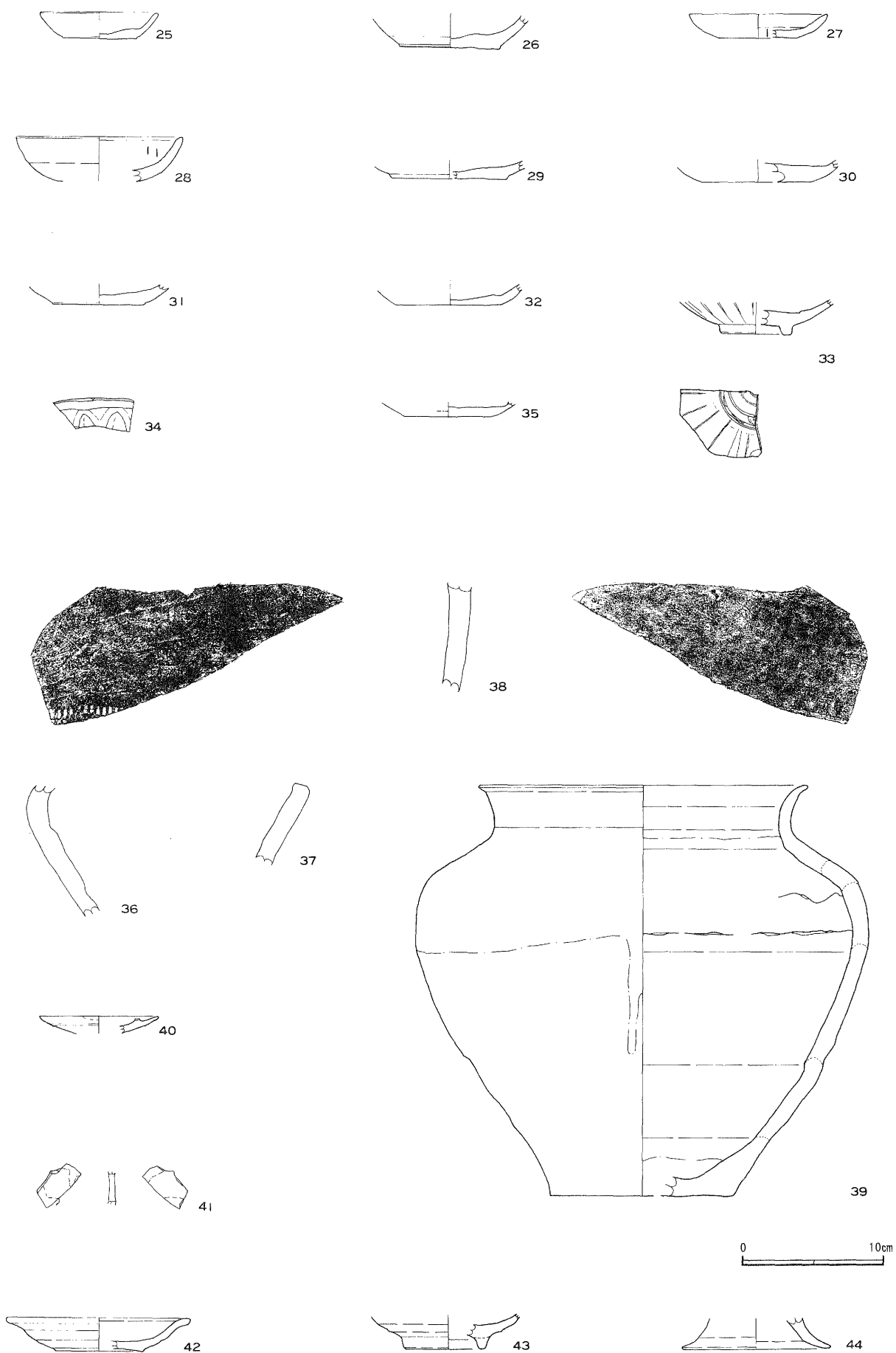
第10図 第2号井戸跡出土遺物



第11図 第3号井戸跡出土遺物



第12図 遺構外出土遺物（1）



第13図 遺構外出土遺物（2）

器高3.8cm、底径7.6cmを測る。胎土は緻密で黒色粒子、雲母をわずかに含み軟質である。色調は浅黄橙色を呈する。焼成はやや不良である。

4は確認面で採取した。器形は、立ち上がりが直線的に開くが、底部と体部の境界に強いナデが巡り、段を形成している。底部に回転糸切り痕とスノコ状の圧痕をわずかに残す。底部内面に静止指ナデ調整が見られる。残存率は底部の90%であり、底径8.2cmを測る。胎土は緻密で黒色粒子、赤褐色粒子、雲母をわずかに含み軟質である。色調は浅黄橙色を呈する。焼成はやや不良である。

5は確認面で採取した。器形は、底部が平底で、立ち上がりは鋭く境界に稜を持ち直線的に開き、強いナデにより段がつくられている。底部に回転糸切り痕を残す。残存率は底部の75%であり、底径7.5cmを測る。胎土は緻密で黒色粒子、赤褐色粒子をわずかに含み軟質である。色調は浅黄橙色を呈する。焼成はやや良好である。

6は確認面で採取した。器形は、立ち上がりが内湾し直立気味になる。底部に回転糸切り痕を残す。底部と体部の境は明瞭である。残存率は底部の25%であり底径7cmを測る。胎土は緻密で黒色粒子、雲母をわずかに含み軟質である。色調は橙色を呈する。焼成はやや良好である。

7は確認面で採取した。立ち上がりは直線的に開き底部付近に段を有する。口縁部付近で外反して、口縁部で直立気味になる。底部は回転糸切り痕をわずかに残す。残存率は20%であり、口径9.6cm、器高1.7cm、底径6cmを測る。胎土は緻密で黒色粒子、赤褐色粒子をわずかに含み軟質である。色調は浅黄橙色を呈する。焼成はやや不良である。

8は確認面で採取した。器形は体部が直線的に開く。内面にロクロの痕跡を、また底部に回転糸切り痕の痕跡を明瞭に残す。残存率は全体の20%であり、口径8.6cm、器高1.9cm、底径5cmを測る。胎土は緻密で黒色粒子、雲母をわずかに含み軟質である。色調はにぶい黄橙色を呈する。焼成はやや不良である。

9は確認面で採取した。器形は、体部が大きく直線的に開き、底部との境界は明瞭である。底部は回転糸切り痕が明瞭に残る。残存率は底部の25%であり、底径9.0cmを測る。胎土は緻密で、黒色粒子をわずかに含み軟質である。色調は橙色である。焼成は良好である。

10は確認面で採取した。立ち上がりはゆるやかに内湾し、底部はわずかに回転糸切り痕の痕跡を残す。残存率は底部の25%であり、底径9.8cmを測る。胎土は緻密で赤褐色粒子、雲母、細礫をわずかに含み軟質である。色調は橙色を呈する。焼成はやや不良である。

11はC-2グリッドより検出した。器形は、立ち上がりがゆるやかなため、底部との境界が不明瞭である。底部は器肉が厚く、上げ底気味である。残存率は底部の20%であり、底径9.0cmを測る。胎土は緻密で、雲母、礫をわずかに含み軟質である。色調はにぶい黄橙色を呈し、焼成はやや不良である。

12は確認面で採取した。底部の器肉はやや厚めである。残存率は底部の10%であり、底径8.8cmを測る。胎土は緻密で、赤褐色粒子、黒色粒子をわずかに含み、軟質である。色調はにぶい黄橙色を呈し、焼成は不良である。

13は確認面で採取した。器形は、底部と体部の境界が不明瞭である。底部内面周縁に強いナデが巡る。底部には回転糸切り痕が残る。残存率は底部の45%であり、底径9.2cmを測る。胎土は緻密で黒色粒子、赤褐色粒子、雲母をわずかに含み軟質である。色調は橙色を呈する。焼成はやや不良である。

14は確認面で採取した。底部は平底で、体部との境が明瞭である。残存状態は底部のみ完全に残って

おり、底径8cmを測る。胎土は緻密で赤褐色粒子、雲母をわずかに含み軟質である。色調は浅黄橙色を呈する。焼成はやや不良である。

15は確認面で採取した。立ち上がりがゆるやかであり、体部と底部の境が不明瞭である。底部内面周縁に強いナデが巡る。残存率は底部の90%であり、底径8.6cmを測る。胎土は緻密で黒色粒子、赤褐色粒子、雲母をわずかに含み軟質である。色調はにぶい橙色を呈する。焼成はやや不良である。

16は確認面で採取した。器形は、立ち上がりが直線的で、口縁部付近で内湾して直立する。残存率は口縁部の25%であり、口径12.8cmを測る。胎土は緻密で黒色粒子、赤褐色粒子をわずかに含み軟質である。色調は浅黄橙色を呈する。焼成はやや不良である。

17は確認面で採取した。器形はやや直線的に開く。残存率は全体の60%であり、口径13.4cm、器高3cm、底径8.3cmを測る。胎土は緻密で黒色粒子、赤褐色粒子、雲母をわずかに含み軟質である。色調はにぶい橙色を呈する。焼成はやや不良である。

18は確認面で採取した。器形は、底部が円柱状に残り、回転糸切り痕をわずかに残す。立ち上がりは直線的に開き、口縁部付近で内湾し直立する。残存率は全体の30%であり、口径11.8cm、器高2.4cm、底径7cmを測る。胎土は緻密で黒色粒子、雲母をわずかに含み軟質である。色調はにぶい褐色を呈する。焼成はやや不良である。

19は確認面で採取した。底部は平底で、立ち上がりは鋭く境界に稜を持つ。直線的に開き、体部半ばでやや直立気味になる。残存率は全体の40%であり、口径12.6cm、器高3.4cm、底径6cmを測る。胎土は緻密で黒色粒子、赤褐色粒子、雲母をわずかに含み軟質である。色調はにぶい黄橙色を呈する。焼成はやや不良である。

20は確認面で採取した。立ち上がりは内湾し、口縁部付近で直立気味になる。残存率は全体の40%であり、口径12.8cm、器高3.2cm、底径8.2cmを測る。胎土は緻密で黒色粒子、赤褐色粒子、雲母をわずかに含み軟質である。色調は浅黄橙色を呈する。焼成はやや良好である。

21は確認面で採取した。立ち上がりは、直線的に開くが、体部半ばで内湾して口縁部で直立する。底部に回転糸切り痕を残す。残存率は全体の15%であり、口径13.6cm、器高3.3cm、底径8.2cmを測る。胎土は緻密で黒色粒子、赤褐色粒子、雲母をわずかに含み軟質である。色調は浅黄橙色を呈する。焼成はやや不良である。

22は確認面で採取した。器形は、底部から直線的に開き、体部半ばで直立気味になりながら直線的に立ち上がる。残存率は口縁部の25%であり、口径14.8cm、器高3.4cm、底径8.8cmを測る。胎土は緻密で黒色粒子をわずかに含み軟質である。色調は浅黄橙色を呈する。焼成はやや不良である。

23は確認面で採取した。器形の立ち上がりは直線的に開き、体部半ばで内湾して直立する。底部の器肉は薄くなっている。残存率は全体の15%であり、口径13.6cm、器高2.4cm、底径9.6cmを測る。胎土は緻密で黒色粒子、雲母をわずかに含み軟質である。色調はにぶい黄橙色を呈する。焼成はやや不良である。

24は確認面で採取した。器形は立ち上がりが直線的に開いている。残存率は全体の25%であり、口径11.2cm、器高3cm、底径6.8cmを測る。胎土は緻密で黒色粒子、赤褐色粒子をわずかに含み軟質である。色調は浅黄橙色を呈する。焼成はやや不良である。

25は確認面で採取した。立ち上がりは底部付近から軽く内湾しつつ直線的に開く。底部内面の中心に

強いナデが巡っており、器肉が薄くなっている。残存率は全体の50%であり、口径8.4cm、器高1.9cm、底径5.3cmを測る。胎土は緻密で黒色粒子、赤褐色粒子をわずかに含み軟質である。色調は浅黄橙色を呈する。焼成はやや不良である。

26は確認面で採取した。器形は立ち上がり直線的に開く。底部は円柱状に残っている。残存率は底部の40%であり、底径7cmを測る。胎土は緻密で黒色粒子、赤褐色粒子、雲母をわずかに含み軟質である。色調は浅黄橙色を呈する。焼成はやや不良である。

27は確認面で採取した。器形は内湾して立ち上がる。底部と体部の境界が明瞭である。残存率は全体の15%であり、口径9.8cm、器高1.7cm、底径5.6cmを測る。胎土は緻密で黒色粒子、雲母をわずかに含み軟質である。色調はにぶい黄橙色を呈する。焼成はやや不良である。

28は確認面で採取した。器形は、外反しながら立ち上がり、口縁部で直立する。残存率は口縁部の15%であり、口径11.6cmを測る。胎土は緻密で黒色粒子、赤褐色粒子、雲母をわずかに含み軟質である。色調は浅黄橙色を呈する。焼成はやや不良である。

29は確認面で採取した。底部は円柱状に残り、中心部の器肉が薄くなる。残存率は底部の45%であり、底径8.2cmを測る。胎土は緻密で雲母、細礫をわずかに含み軟質である。色調は浅黄橙色を呈する。焼成はやや不良である。

30は確認面で採取した。底部の器肉が厚い。残存率は底部の25%であり、底径7.6cmを測る。胎土は緻密で黒色粒子、赤褐色粒子、雲母をわずかに含み軟質である。色調はにぶい橙色を呈する。焼成はやや不良である。

31は確認面で採取した。器形は立ち上がり直線的に開く。底部は円柱状に残っている。残存率は底部の40%であり、底径6.4cmを測る。胎土は緻密で黒色粒子、赤褐色粒子、雲母をわずかに含み軟質である。色調はにぶい橙色を呈する。焼成はやや不良である。

32は確認面で採取した。底部に回転糸切り痕とスノコ状の圧痕がわずかに残る。底部内面周縁に強いナデが巡っている。残存率は底部の25%であり、底径7.5cmを測る。胎土は緻密で黒色粒子、雲母をわずかに含み軟質である。色調は浅黄橙色を呈する。焼成はやや不良である。

33はB-4グリッドで検出した。体部外面は鎬蓮弁が施文され、内面は無文である。内面は見込と体部の境に明瞭な段を有する。残存率は底部の15%であり、底径4.9cmを測る。胎土は緻密で、黒色粒子を僅かに含み軟質である。胎土の色調は灰色を呈し、釉薬は緑灰色に発色している。焼成は良好である。釉薬は内面全体と体部・高台外面と豊付まで施されている。

34は口縁部破片である。確認面で採取した。鎬蓮弁が施文されている。胎土は緻密で黒色粒子、赤褐色粒子をわずかに含み軟質である。胎土の色調は灰白色を呈し、釉薬はオリーブ黄色に発色している。焼成は良好である。

35は確認面で採取した。器形は体部の立ち上がり直線的に開き、底部との境に鋭い稜を持つ。残存率は底部の15%であり、底径6.2cmを測る。胎土は緻密で黒色粒子、白色粒子をわずかに含み軟質である。胎土の色調は灰白色を呈し、釉薬は明緑灰色に発色している。焼成は良好である。

36は在地産の壺である。肩部から胴部の破片で、確認面で採取した。外面は粗い横位のナデが施されている。胎土は粗く白色粒子、赤褐色粒子、黒色粒子、礫、長石、雲母を含む。色調は褐灰色を呈する。

焼成はやや不良である。

37は在地産の鉢の口縁部破片である。確認面で採取した。断面形状は方形を呈する。胎土はやや粗く、白色粒子、礫、石英を含む。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

38は確認面で採取した、常滑焼甕胴部破片である。外面に叩き工具の痕跡が残っている。胎土はやや粗く白色粒子、黒色粒子、礫を含む。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

39は確認面で採取した。口縁部は外反して器肉が薄くなるが、折り返しはみられない。胴部外面は縦位のヘラ削りによる調整がみられ、肩部内面は接合痕が残る。自然釉は外面の口縁部から体部上半、内面の底部にかかる。残存率は全体の60%であり、口径23.4cm、器高29.5cm、底径13cmを測る。胎土はやや粗く白色粒子、黒色粒子、礫を含む。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

40は確認面で採取した。形態は、皿内面に環状の仕切りが付くが、切り込みは欠損している。また、高台は見られない。残存率は全体の20%であり、口径8.4cmを測る。胎土は緻密で白色粒子をわずかに含む。胎土の色調は灰黄色を呈し、釉薬は灰白色に発色している。焼成は良好である。釉薬は内面全体と口縁部外面に部分的に施されている。

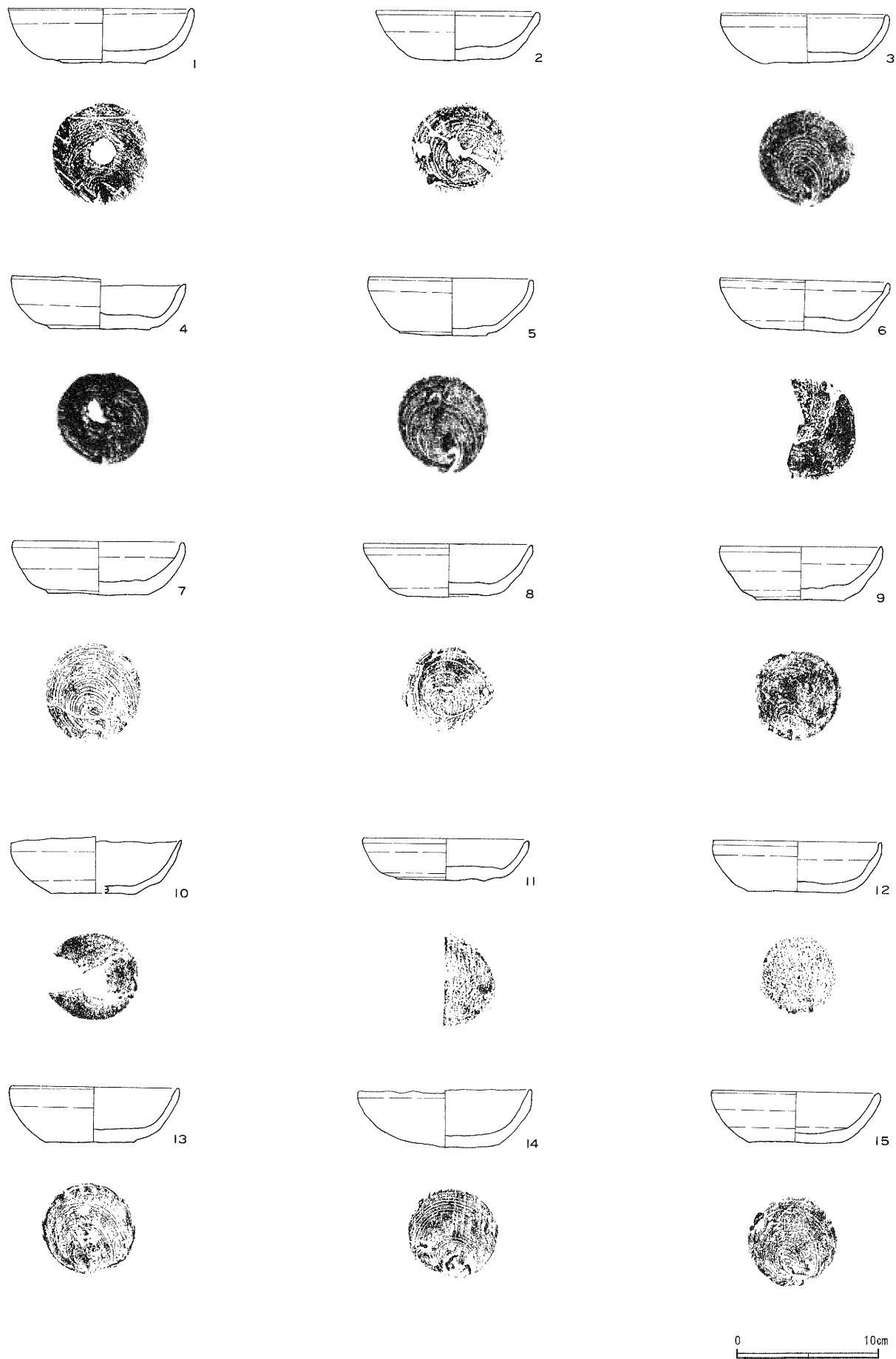
41は陶器の破片で灰釉が施されている。器種は不明である。B-4グリッドで検出した。胎土は緻密で、黒色粒子、白色粒子をわずかに含む。色調は胎土、釉薬ともに灰白色である。焼成は良好である。釉薬はツケガケされている。小破片のため特徴を掴み得ず、いつの時代に属するものかはわからなかった。

42はC-6グリッドより検出した。残存率は全体の30%であり、口縁部から底部に至る破片である。口径13.2cm、器高6.2cm、底径2.4cmを測る。胎土はやや粗く、黒色粒子を多く含み、白色粒子、礫をわずかに含む。色調は灰白色を呈し、焼成はやや良好である。底部は回転糸切りの痕跡を明瞭に残す。胎土の観察より、末野産の遺物と考えられる。

43は高台がナデ付けられている。B-4グリッドで検出した。体部にはロクロによる調整痕が明瞭に残る。残存率は底部の15%であり、底径5.9cmを測る。胎土はやや粗く、赤褐色粒子、黒色粒子、雲母をわずかに含み、礫を多く含む。酸化炎焼成のため色調は外面が明赤褐色を呈し、内面が黒色である。焼成はやや良好である。

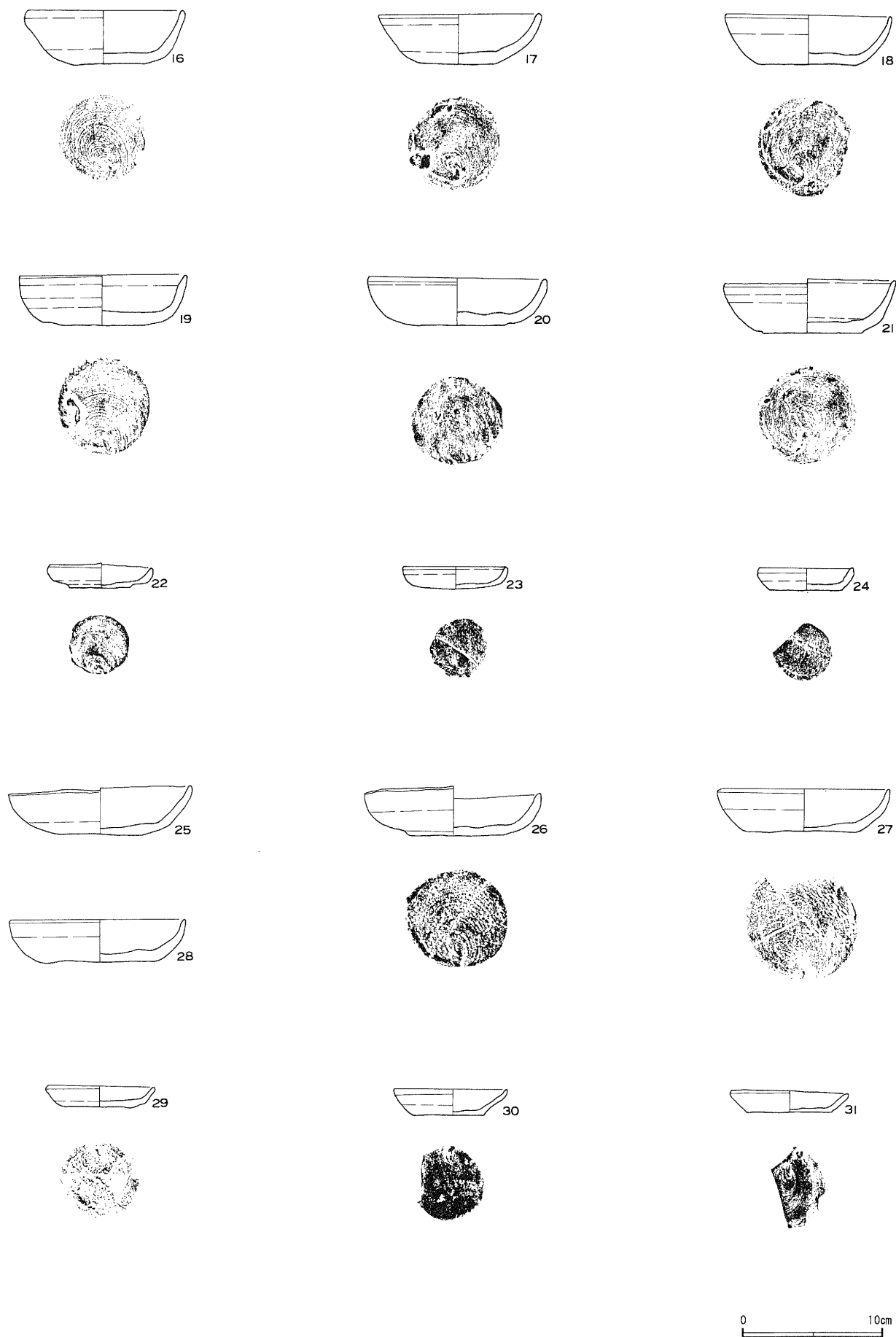
44は台付甕の台部である。D-2グリッドで検出した。台部の器形は底面に向かって外反し裾部が大きく開く。裾部は底面に向かって器肉が薄くなる。残存率は台部の40%であり、台部底径10.2cmを測る。胎土はやや粗く、赤褐色粒子、雲母、礫を含む。色調は黄橙色からにぶい黄橙色を呈する。焼成はやや良好である。

以前に報告した常光院東遺跡、権現山遺跡出土の土師質土器の実測図を、今回の報告分に併せて参考資料として23頁から25頁に呈示した。



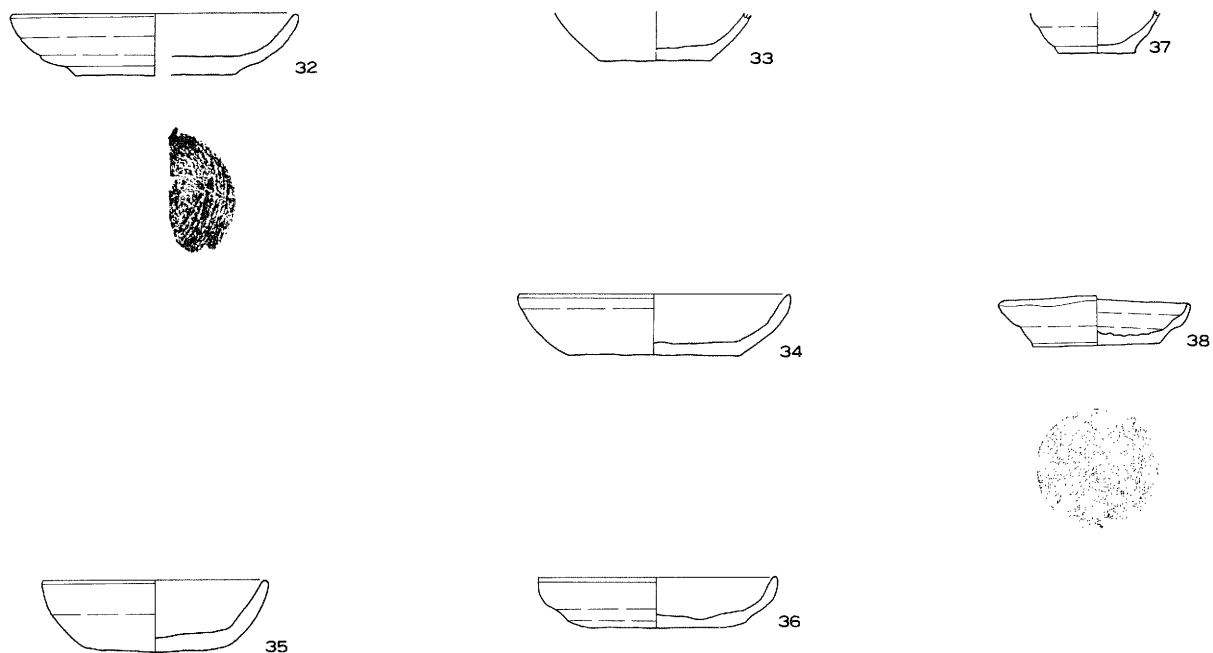
第14図 常光院東遺跡出土遺物（1）

参考資料 2

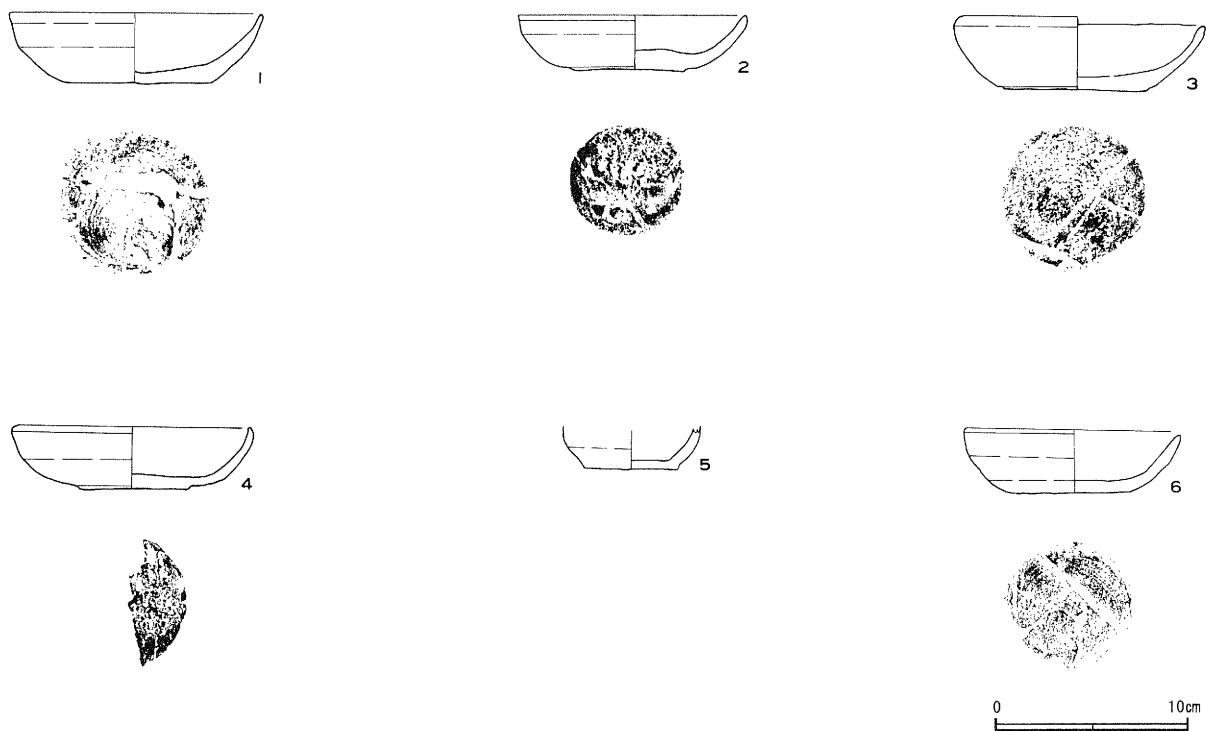


第15図 常光院東遺跡出土遺物（2）

参考資料 3



第16図 常光院東遺跡出土遺物 (3)



第17図 権現山遺跡出土遺物

V 調査のまとめ

土師質土器皿について

この度の調査では土師質土器皿が多く出土し、計36点を数える。その形態的特徴により、中条氏館跡の一部と考えられる常光院東遺跡出土のものと、近接する権現山遺跡出土のものを加え、土師質土器皿の分類を試みた。常光院東・権現山遺跡出土のものについては、寺社下によって既に分類が試みられているため、その分類を参考にした。その結果、2群11類に分けられ、以下に列記する。

大きくは、大皿・小皿に分けられ、それぞれⅠ・Ⅱ群とした。Ⅰ群は、口径と器高の差で類別した。

Ⅰ A a (12-18,12-23,12-17)

口径と器高の差が大きく、器高が低い皿である。外傾してやや直線的に立ち上がり、口縁部または体部上半でナデが施され、口縁部が直立するものである。

Ⅰ A b (16-38,12-21,16-36)

口径と器高の差が多い皿である。外傾してやや直線的に立ち上がるが、体部中央で強いナデにより段がつくられている。

Ⅰ A c (12-20,12-22,15-25,15-27,15-28,15-32,15-34,17-2,17-4)

口径と器高の差がやや多い皿である。内湾して立ち上がり、口縁部でナデが加えられ、直立する。

Ⅰ A d (11-2,12-24)

口径と器高の差がやや多い皿である。外傾して直線的に立ち上がり、そのまま口縁部へと至る。

Ⅰ B a (8-1,13-28,14-1,14-2,14-6,14-7,14-8,14-11,14-15,14-17,14-18,14-20,14-26)

口径と器高の差が少ない皿である。内湾して立ち上がり、口縁部でナデが加えられ、直立する。

Ⅰ B b (12-3,14-3,14-4,14-5,14-9,14-10,14-12,14-13,14-14,15-21,16-35,17-1,17-6)

口径と器高の差が少なく、器高が高い皿である。内湾して立ち上がり、体部中央から上半にナデが加えられ、直立気味になり、口縁部へと至る。

Ⅰ B c (12-2,15-16,15-19)

口径と器高の差が少なく、器高が高い皿である。内湾して立ち上がり、体部下半にナデが加えられて直立し、口縁部へと至る。

Ⅰ B d (12-1)

口径と器高の差が少なく、器高が高い皿である。直線的に外傾して立ち上がり、口縁部は外反してとがる。

Ⅱ類は形態により類別した。

Ⅱ A a (12-7,12-8,13-25,13-27,15-24,15-29,15-30,15-31)

立ち上がりは直線的に外傾する。

Ⅱ A b (15-22,15-23)

立ち上がりは直線的に外傾し、口縁部にナデが施され直立する。

Ⅱ B a (16-37,17-5)

内湾して立ち上がり、口縁部にナデが施され直立する。

この度は遺物の出土状況から、遺物と遺構とを有機的に結びつけて編年的なところまで考察することができず形態的な分類にとどまってしまった。今後機会があれば、さらに検討して再考を試みたいと思う。

中条氏と中条氏館について

中条氏は、常光が長承元年（1132）に国司に任じられ、武蔵國中条に下向してからおこったものと考えられている。その常光の屋敷は地名に上中条字光屋敷として伝えられている。常光の長男に有家があり、その子息が家長である。中条家長は永万元年（1165）に生まれ、治承四年（1180）の石橋山の合戦に参加して以降、平家追討に加わって軍功をあげ、頼朝没後、頼家、実朝、頼経に仕え従五位下出羽守に任じられた。嘉禄元年（1225）には幕府の評定衆に任じられ、貞永式目の制度にも参画し明法家として知られている。そして、嘉禎二年（1236）に没している。

中条氏館は常光院創建のいきさつから、中条家長の代には存在していたと考えられる。しかし、光屋敷の館から中条氏館へ中条氏がいつ移り住んだかは不明であり、12世紀後半頃に中条氏館が創建されたと推察されているに過ぎない。また、中条氏がいつこの地より去ったのかも明らかでなく、併せて中条氏館が機能しなくなった時期も不明である。

今回の調査では遺構があまり検出されず、明確に館跡に関連するといえる遺構はみられなかった。出土遺物は土師質土器皿が大半を占めていたが、それらは13世紀から14世紀にわたるものと考えられる。青磁、白磁は14世紀前半の所産のものと考えられ、在地産の鉢・壺も14世紀前半に位置づけられる。唯一、常滑焼の甕が12世紀第三四半期のものと考えられるが、これを除いて中条氏館が創建されたと考えられる12世紀後半にさかのぼる資料は見られなかった。わずかに1点ではあるが、中条氏館創建頃と考えられる資料が出土したことは大きな成果と言えよう。中条氏館の創建から廃絶に関わる問題は、今後の調査による資料の増加を待って論じることとしたい。

引用参考文献

『熊谷市史』前編 熊谷市 1963

『埼玉県の中世城館跡』 埼玉県教育委員会 1988

『中世の熊谷の武士たち』 熊谷市立図書館 1998

浅野晴樹 「関東地方における中世在地系土器について」『中近世土器の基礎研究』Ⅲ 日本中世土器研究会 1987

浅野晴樹 「中世在地系土器の実態」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第8集 1997

浅野晴樹・服部実喜 「各地の土器様相－関東－」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 1995

浅野晴樹 『北島遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第81集 （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1998

今野近富 「土師器皿」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 1995

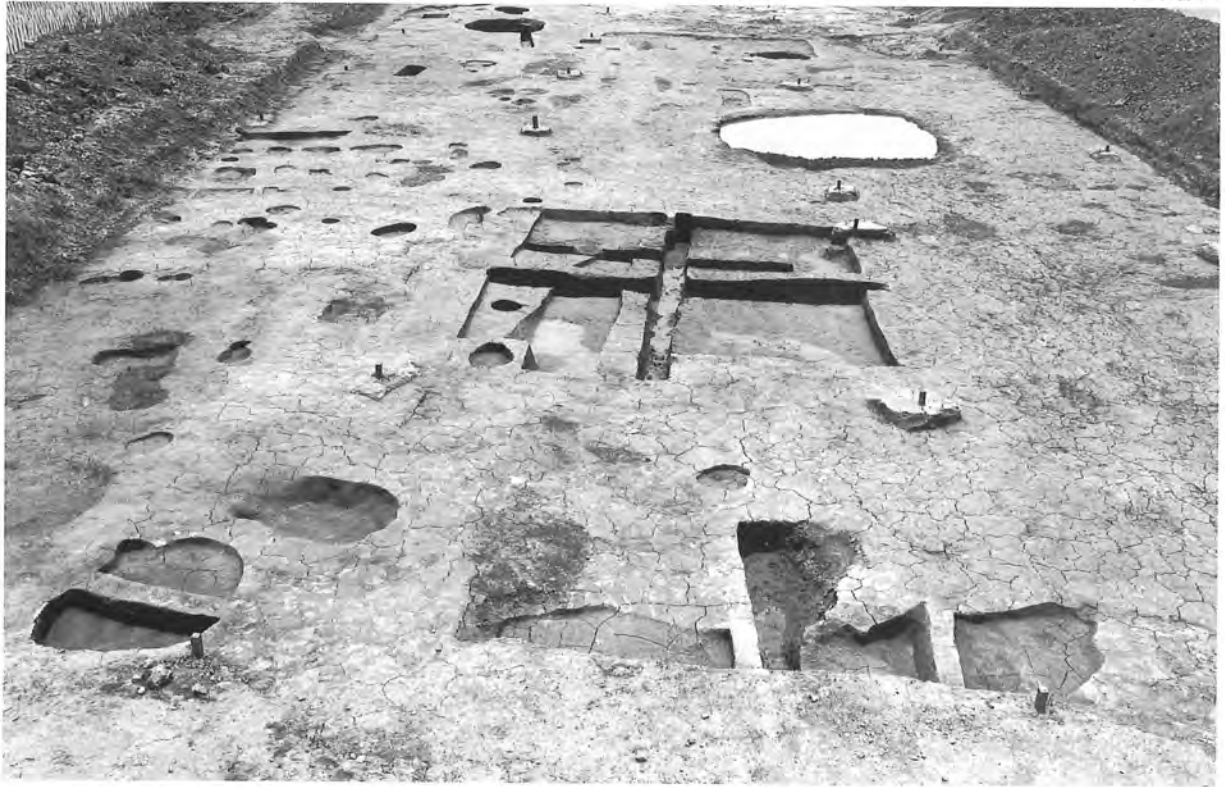
寺社下博 『中条遺跡群Ⅲ 権現山古墳・常光院東遺跡』 熊谷市教育委員会 1982

中野晴久 「中世陶器－常滑・渥美－」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 1995

山本信夫 「中世前期の貿易陶磁器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 1995

若松良一他 『堂地遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第266集 （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2000

写真図版



調査区（北から）

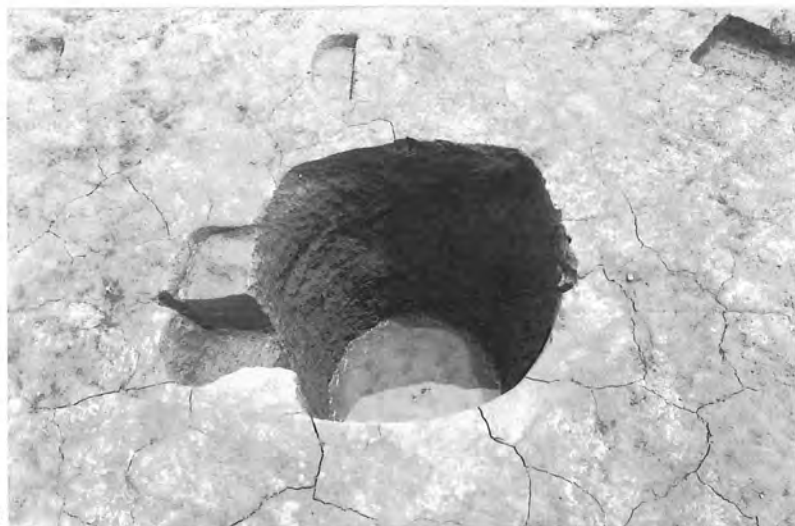


調査区（南から）

図版2



第1号井戸跡



第2号井戸跡



第3号井戸跡



第1号土坑



第2号土坑



第3号土坑



第5・6号土坑



第1号沟迹

図版4



第13図39



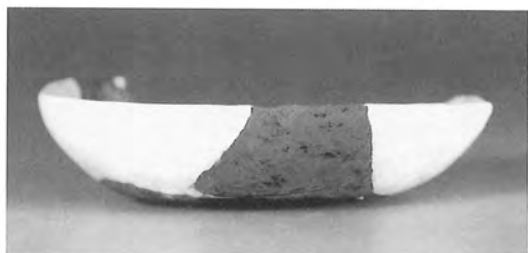
在地産の土器（左上から第13図36 第9図2・1・3 第13図37 第11図3）



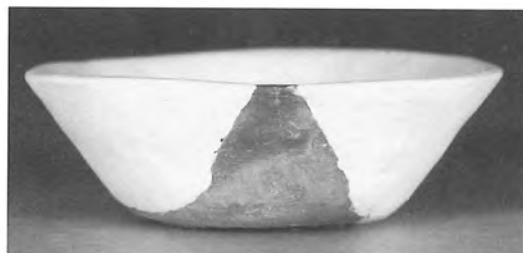
第8図1



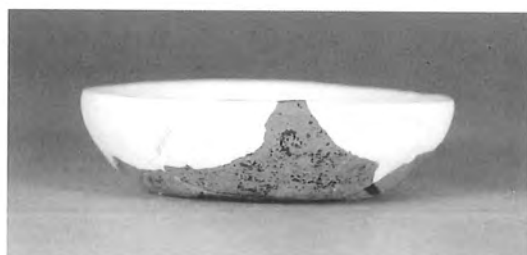
第12図2



第12図17



第12図1



第12図3



第11図2



第12図19



第12図20



第12図18

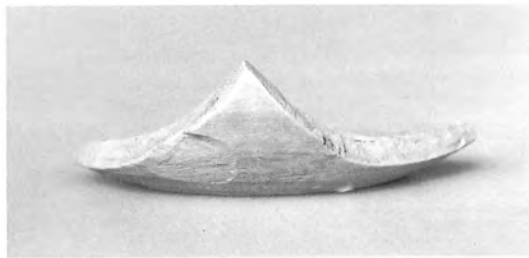


第12図23

図版6



第13図25



第12図6



第12図7



第12図8



第10図1



第13図42



青磁、白磁（左上から）第13図34・33・35



左上から
第12図9・5・4・12・11・10



左上から
第12図15・14・13・22・21・16



左上から
第13図26 第12図24
第13図29・28・27・32・31・30

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちゅうじょうしやかたあと							
書名	中条氏館跡							
副書名	平成13年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書							
巻次	—							
シリーズ名	—							
シリーズ番号	—							
編集者名	蔵持俊輔							
編集機関	埼玉県熊谷市教育委員会							
所在地	〒360-8601 埼玉県熊谷市宮町2-47-1 TEL048-524-1111							
発行年月日	西暦2002（平成14）年3月29日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	(°′″)	(°′″)		(㎡)	
ちゅうじょうしやかたあと 中条氏館跡	くまがやし おおあざ 熊谷市大字 かみちゅうじょう 上中条1741-3	11202	036	36° 10′ 51″	139° 24′ 36″	20010529 ～ 20010628	550	農業集落 排水施設 の建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
中条氏館跡	城館跡	奈良・平安			土師器 須恵器 坏・皿			
		鎌倉・室町			土師質土器 皿 青磁 碗 白磁 合子・皿 陶器（常滑焼甕）			
		江戸時代			陶器 （瀬戸・美濃灯明皿）			
			溝跡 1条 土坑 6基 井戸跡 3基 ピット 3基 用途不明遺構 1基	鉄製品 釘				

平成 13 年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

中 条 氏 館 跡

平成 14 年 3 月 29 日発行

発行／埼玉県熊谷市教育委員会

印刷／関印刷株式会社



さくらのまち“熊谷”